







第七章

希臘(千八百二十五年ヨリ千八百三十

年ニ至ル)

其ニ一ニ尼哥拉士帝ノ即位

露帝亞歷山一世ノ崩殂後數週間ハ歐洲列國皆

希臘問題ヲ措キテ專ラ露國ニ發生セシ事変ニ

注目セリ

先帝亞歷山一世ニハ子ナクシテ唯タ三人ノ身

アリ長クコニスタント云ヒ代リテ帝位ヲ

紹クヘキ者ナリ然ルニコニスタントハ人ト

為リ聰慧ナラサルニアラガレテ而モ極メテ學

問教育ニ乏シク且ツ其ノ精神稍々錯乱シテ時

トシテハ極メテ温厚慈仁ナルモ時トシテハ暴

大正十一年四月



虐殘忍ニシテ頗ハ其ノ父ポール一世ニ似タリ  
其ノ嘗テ先妻ヲ離婚シ波蘭ノ王女ダールドシ  
ンスカールヲ娶レルヤ醜聞世ニ喧シクコンスタ  
ンチンハ其帝位継紹、權利ヲ拋棄スルニ至レ  
リ而シテ先帝亞歷山一世ハ其ノ請ヲ容シテ之  
ヲ皇嗣ト為サ、ルニ決シタルモ而モ固ク其事  
ヲ秘シテ人ニ示サズ故ニコンスタンチン、次  
ニテ帝位ヲ紹クヘキ其ノ身尼哥拉士大公モ亦  
先帝カ其ノ身ヲ皇嗣ニ指定シタル詔勅ノ存ス  
ルコトヲ知ラス既ニシテ先帝崩殂ノ報ノ聖彼  
得堡ニ達スルヤ尼哥拉士ハ右ノ詔勅ヲ突見セ  
シモ此ノ時ニ至ルマデ秘シテ世ニ顯ハレザリ  
シ皇兄ノ辭位ヲ奇貨トシテ自ラ帝位ニ即クコ

ト好マズ千八百二十五年十二月九日先ッ自  
ラコンスタチン皇帝ニ忠誠ヲ尽スノ宣誓ヲ  
為シ又群臣ヲ促シテ同一ノ宣誓ヲ為シメタ  
リ是ヨリ先キコンスタチンハ波蘭兵ノ指令  
官トシテヴルハ右リシガ先帝崩殂ノ  
報ニ接シテ其ノ身尼哥拉士大公ヲ皇帝ト仰ク  
ベキヲ宣言シ尼哥拉士ハ又其ノ皇兄カ更ラニ  
正式ニ其ノ帝位継紹、權利ヲ拋棄スル旨ヲ宣  
言セサハ以上ハ自ラ帝位ニ即クテ肯欲セスト  
為シ而シテ此ノ如ク二人交リ謙讓辭退ラ競ハ  
ハカ為メ適ク大慘事ヲ招致スルニ至リ是ヨ  
リ先キ露國ノ本土及ヒ波蘭王ニ於テ數多ノ秘  
密會社アリテ孰シモ革命的傾向ヲ有シ先帝亞



歴山ノ晩年ノ政策ノ甚シク復古主義ニ傾キシ  
ヲ視テ大ニ激昂、念ヲ生シタリシカ此等ノ會  
社ハ主トシテ帝國軍隊ニ屬シタル貴族等ノ組  
成スル所、係リ西部及南部ノ西軍團ニ就  
中オカ拔群ナル人物ヲ有シ其ノ首領ペステル、  
リレイエフ、ムラウイエフ、ウィルゲ子ツフ、  
ウーミンスキ、輩ハ唯ダニ波蘭王ニ於テ議院  
制度ノ突ヲ舉ケムコトヲ企圖シタルノミナラ  
ス更ニ露國ニ於テ之ヲ創立セムト欲シ其ノ中  
ノ或ル者ハ共和政ヲ主張シ他ノ或ル者ハスラ  
ーヴ民族ヲ聯邦ヲ組織セント欲シ亞歴山帝ノ  
崩殂後帝位ヲ空シクスマルコト三週間ノ久シキ  
ニ彌リテ政權ノ作用弛廢シタルニ乘シテ窺カ

ニ聖彼得堡ノ親衛兵ヲ煽動シ十二月二十六日  
ニ至リ尼哥拉士大公遂ニ帝位ヲ稱シ兵士ニ向  
フテ其ノ能ク忠誠ヲ尽スヘキヲ宣誓ヲ命シタ  
ルニ際シ皇兄コンスタンチンヲ奉戴スルヲ名  
トシテ叛乱ヲ起サシメシト又計リタルモ其  
ノ煽動ニ應シタル者ハ僅ニ一隊ニ過キナリ  
キ新帝ハ變ヲ聞キテ直ニ叛兵ノ屯集地ニ至  
リ之ヲ諭シテ解散セシメント欲シタルモ其ノ  
聞タズトナラス已ムヲ得ス其ノ手兵ニ令シテ  
之ヲ砲撃セシテ須臾ニ叛兵ハ四散跡ナキ  
ニ至リ而シテ之ト同時ニ南部ノ各地ニ起リ  
タル叛乱ニ亦日ナラズシテ平定ニ歸シ翌年一  
月下旬ニ至リテ列國皆尼哥拉士ノ露帝タルコ



トシ公認シ國中ノ臣民ハ皆能ク其ノ命令ニ服  
従スヘキヲ矢ヘリ夫レ此ノ如ク新帝即位ノ始  
メニ於テ叛兵ニ討スルノ措置ハ人ヲシテ其ノ  
勇断果決為スアルノ資ニ富ムルコト先帝ト大  
ニ其ノ趣ヲ異ニシタルヲ豫想セシメ而シテ帝  
ノ將來ノ歴史ハ亦能ク此ノ豫想ノ失カラザル  
ヲ証明シタリ  
新帝尼哥拉士ハ其ノ當未ク三十ニ滿タズシテ  
當時ノ外交社會ニ殆ント其ノ人ト為リヲ知シ  
ル者ナク多クハ兵營ノ裡ニ永ク其ノ身ヲ埋没  
シテ復タ出ツルコト能ハズトナシ曾テ其ノ為  
スルニ歐洲列國ヲ震動スルニ至ルヘキヲ察セ  
スメテハニツキ如キハ露國ノ新帝<sup>カ</sup>其ノ財

政ノ紊乱セルヲ整理シ其ノ行政ニ弛廢セルヲ  
刷振シ其ノ中央政府ノ権力ノ萎靡シタルヲ皇  
張セニコトヲ務メ復タ他ヲ顧ミルコトナカハ  
ヘシト思料セリ蓋シ此等ノ事ハ尼哥拉士一古  
カ固ヨリ忽諸ニ付スルコトヲ欲セザルニシ  
テ帝ハ最モ專制權ヲ把持シテ失フコトナカラ  
ント欲シ又且ツ自ラ之ヲ運用スルニ必要ナル  
材カヲ有セリ其ノ思想ハ極メテ明晰ニシテ凡  
ソ人臣ヲ統治スルノ方法ハ一ニ武断的ニ之ニ  
命令スルニ在リトナシ敢テ其ノ臣民カ政治ヲ  
論議シ若クハ其ノ君ト俱ニ主權ヲ分ツコトヲ  
許サス帝ハ其ノ元亞歷山一古ノ如ク曾テ空想  
ニ耽ルコトナク又自由主義ニ泥ムコトナク其



、在位三十年、間歐洲全土ノ革命党ノ為メニ  
最モ果斷ニシテ最モ恐ルヘキノ大敵トナレリ  
然レトモ帝ハ其ノ内政ニ心ヲ用ユルカ為メニ  
外ニ向フテ自國ノ利益ヲ追賜シ若クハ之ヲ防  
衛スルコトヲ忘ル、者ニアラズ就中東方向駐  
ハ即位ノ始メヨリ最モ其ノ注意ヲ惹キ其ノ身  
ヲ終ルマデ絶ヘテ之ヲ忽諾ニ付スルコトアラ  
ザリキ蓋シ帝ノ志ハ先帝亞歷山一古ト均シク  
依令ヒ全ク土耳其帝國ヲ勦滅スルコト能ハザ  
ルモ力メテ其ノ勢力ヲ削弱シ之ヲシテ事ゴト  
ニ露國ノ意思ニ服従シテ復タ違フコト能ハガ  
ラシムルニ在リ然レドモ帝ハ其ノ兄亞歷山ノ  
如ク人ヲ欺ク事ナリテ容易ク其ノ目的ヲ達

更スル者ニアラズ帝ハ專門ノ外交家ト均シク  
必要ノ場合ニハ巧ニ其ノ意思ヲ陰蔽シテ曾  
テ人ニ知ラセムルコトナク而シテ一旦其ノ志  
既ニ決スルヤ彼ニ專門ノ外交家カ何カニ權實  
ヲ弄シ詐謀ヲ事トスルモ遂ニ其ノ實行ヲ妨ク  
ルコト能ハサル膽勇ヲ有シタリキ  
其二 露國ハ「ユルチマタン」ウエリ  
尼哥拉士一古ハ其ノ即位ノ始メニ於テ土耳其  
帝國ニ對シ先帝亞歷山一古ノ政策ヲ継紹シテ  
更スル更ニ其ノ崩スル前ニ土耳其格ト俱ニ争鬪  
山一古ハ其ノ崩スル前ニ土耳其格ト俱ニ争鬪



ヲ開キ歐洲列國ノ調停ヲ斥ケ兵力ヲ用ヒテ其  
ノ要求ヲ貫クノ決心ヲ表白セリ故ニ尼哥拉士  
帝モ亦其ノ亡兄ノ志ヲ紹キテ土耳其格政府ニシ  
テ若シ其ノ要求ニ應セザルトキハ之ト俱ニ戰  
ヲ開クノ意アルコトヲ示セリ但ダ新帝ハ勇斷  
果決ニシテ先帝ノ如ク徒ラニ空言ノ脅迫ヲ事  
トスル者ニアラス故ニ帝ガ其ノ即位ヨリ纔カ  
ニ二月ヲ経タル後(千八百二十六年三月十七  
日)土耳其格帝ニ送レハ最後ノ促答書ハ大ニ歐洲  
列國ヲ震駭セリ此ノ促答書ハ言辭最モ倨傲ヲ  
極メ土耳其格政府ニ迫ルニ下ニ記シタル三箇ノ  
條件ヲ以テシタルモノナリ一ニ云クモルタル  
イ一及キワラシムル公領地ニ於ケル政事上ノ軍

事上及ヒ民事上ノ制度ハ總テ千八百二十一年  
前ノ旧態ニ復セシムルニ白クセリ二ニ白クセルヤハ  
代議士ノ監禁ヲ釈スルニヤ國計ハビユシヤ  
レスト條約ニ規定シタル制度ヲ設ケルニ三ニ  
白ク土耳其格ハ其全權ヲ使テ露國ノ國境ニ送リ  
ユシヤレスト條約中千八百十六年以降兩帝國  
ノ間ニ紛争ヲ招致セタル諸般ノ問題ニ就キテ  
露國ノ委員ト談判ヲ遂ケルニ白クセリ而シテ露  
帝ハ土耳其格政府ニ六週間ノ猶豫ヲ与ヘ若シ此  
ノ期限ヲ過キテ土耳其格猶小具要求ニ應セザルト  
キハ露國ノ代理公使ハ直ニ君士坦丁堡ヲ退去  
スルヲ高シテ是ヨリ生ズル結果ハ土耳其  
於テ之ヲ測知スルコト又スシニ難クニアラサ



ルベシト言ヘリ

希臘ノ事、就キテハ露帝ハ其促唇書ニ於テ一  
言ニ載スル所アラサリキ而シテ人君ニ帝ニ向  
フニ希臘ノ事ヲ以テスレハ帝ハ全ク意ニ介セ  
サレ者ハ如ク言フ是レ叛逆人ナリ革命党ナリ  
野蠻人ナリ凡ク臣民ノ具君主ニ叛キテ勝ヲ得  
シコトハ余ノ患ヲ欲セサル所ナリ況ンヤ之ヲ  
援ケテ具志ヲ遂ケシムルヲヤトキテ其言ニ  
然レハ列國ノ外交官ハ容易ニ帝ニ此言ヲ信セ  
ス就中カシニシグハ露帝カ陽ハ此ノ如キ言  
ヲ為シテ陰カニ希臘ノ独立ニ同情ヲ表スル者  
ヲ寵信シカポトダストア等ノ軍ヲ絶ヘス具声  
息ヲ通スルヲ諷知シ其決シテ希臘ヲ捨ツル

意ヲキコラ料察セリ且ツ俄令ニ帝ハ直接ニ希  
臘人ノ叛乱ヲ助ケルコトヲアラストスルモ露兵  
一ツヒダニテ一ツヒダ岸ノ公領地ニ入ルトキハ  
土耳其格ニ亦具兵ヲダニテ一ツヒダ方面ニ派遣セ  
サレハヘカラサレヲ以テ其能ク希臘人ヲ征服セ  
シコトハ固ヨリ得テ望ムヘキニアラスカシニ  
シグハ又露帝ニシテ一ツヒダ戦コラ土耳其格ニ克  
クトキハ必スヤ英國ヲシテ其勢力ヲ弱ムルガシ  
キ島ニ振フコトヲ得セシメサレハヘキヲ知トリ  
故ニ彼ハ其全カラ竭シテ露王ノ開戦ヲ防止セ  
サレハヘカラサレト為シ且ツ其戦ヲ起ルト否トハ  
論ナク豫メ露國ト俱ニ一ツ條約ヲ訂結シテ露  
國ハ檢束シ他日露國ハ其独力ヲ以テ東方問題



ッ決定セントスルヲ制止スルノ計ヲ講究セリ  
是ヨリ先キ英國ハ希臘問題ニ就キテ自ラ兩交  
戰國ノ間ヲ調停シ他國ノ協賛ヲ仰カスニテ独  
力以テ之ヲ決定センコトヲ望ミ而シテカンニ  
シグハ一方ニハ英國ノ干渉ヲ恐レ他方ニハ佛  
國及ヒガルシアニ宛テ陰謀ヲ愛ヒテ速ニ具調  
停ノ局ヲ結ハント故シ仍テ自國ノ為メ最モ  
便宜ナル媾和ノ方案ヲ定メ具從弟マトラツト  
フオールドヲ東歐ニ送りテ之ヲ土耳其及ヒ希臘  
ノ兩政府ニ提供セシメタリ具媾和ノ方案ハ一  
ニ英國保守党ノ旧来ノ政策ニ本キテ一方ニハ  
土耳其帝國ノ衰亡ヲ救ヒ他方ニハ地中海ノ沿  
岸ニ新クニ一ノ海國ノ勃興スルヲ防止スルヲ

旨トシタル者ニシテ希臘ヲ版圖ヲモレト及ヒ  
其羣島ニ限縮シテ之ヲ其自治ニ任シ土耳其  
對シテ亦唯タ附庸國ノ關係ヲ有スルニ止マ  
ヘシト為セリストツトフオールドニ具途次先  
コトヲプロットニ到リテ之ヲ希臘政府ニ示シタ  
ルニ希臘政府ハ其方案ニ從フテ英國ニ調停  
托スルニトテ承諾セリ時方ニ千八百二十六年  
一月ナリ是ノ時ニ方リ希臘人ハ土耳其兵下  
戰フテ連リニ敗テ取リイブラヒン及ヒレニ  
ツト「ボシヤ」ハ西部希臘ノ要塞ニクロニギリ  
薄リ希臘人ハ勇ヲ鼓ヒテ此寨ヲ嬰守セシメ而  
モ衆寡敵セズニテ具陷落旦夕ニ迫リ是レ希  
臘政府ハ容易ク英國ノ提議ニ聽キル以テ十月



トス既ニシテストラットフォールド、其年二月  
君士坦丁堡ニ到リ土耳其政府ニ告クニ調停  
ノ事ヲ以テシタルモ當時土耳其政府、希臘征  
討軍ノ連リニ勝テ奏マヘルヲ見テ大ニ倨傲、念  
ヲ生シ加フニ奧國政府ノ陰力ニ之ヲ煽動ス  
ルニ遭ヒ國ク執リテ英國ノ調停ヲ拒絶シ土帝  
ニ断シテ自己ト其叛民トノ間ニ他國ノ干涉ヲ  
容ルコトヲ肯ムセストナシ而シテ之ト同時  
ニ露國ノ要求ニ對シテモ亦容易ニ之ヲ容納ス  
ルノ色アラザリキ  
英國政府、豫メ土帝ニ反對アルヘキヲ知レリ  
故ニ一方ニ土廷ト俱ニ談判應答ヲ重ヌルト  
同時ニ他方ニ露帝ト土廷トヲ併セテ之ヲ恐

赫々ル手段ヲ案出シ同年二月ウヰルニ  
公ヲ聖彼得堡ニ派遣セリ而シテ其辭柄トスル  
平ハ露帝ノ即位ヲ賀スルアリモ其実は之  
ト俱ニ東歐ノ事件ヲ協談スル意在リ蓋シウヰ  
リントシ公ハ其戦功ノ顯著ナルト其保守主義  
ノ人物タルトノ故ニヨリテ最モ露帝ニ敬重ヲ  
受ヘキ者ニシテ公ハ露都ニ達シテ露帝ニ謁シ  
告ケルニ英國政府ハ露土二國ノ中間ニ五チテ  
其紛争ヲ和解スルノ方ヲ執ルヘキヲ以テ併  
セテ土廷ト希臘トノ紛争ヲ閉メテ英國政府  
調停ニ就キテ露國ノ同意ヲ得ニコトヲ乞フ  
然ルニ第一ノ項ニ就キテハ露帝ハ其土耳其  
ノ事論ハ單ニ自國ノ事ニ屬シ他國ハ其間ニ干



涉シテ其獲ント欲スル利益ヲ奪フコトヲ許サ  
スト稱シ断乎トシテウエリントシ、提議ヲ拒  
斥シタリ是、於テウエリントシ、更、英國  
希臘問題ニ就キテ至大ノ關係ヲ有シ之ヲ其自  
然ニ放遺スルコト能ハサルヲ説キ露國若シ希  
臘問題ニ関スル英國ノ調停業ニ同意ヲ表スル  
トキハ英國モ亦露土二國ノ紛争ニ就キテ嚴  
中五ヲ守ルヘキモ然ラズンバ英國ハ東歐、於  
テ全ク行動自由ヲ有シ以テ其為リント欲スル  
所ヲ為スヘキヲ告白セリ元來露帝ハ其外觀  
於テ極メテ粗放ナカ如クシテ實ハ其思慮  
周密ナルコト多クカンニングニ讓ラス故ニ英  
國ハ露帝ハ自國ニ詢ラスシテ独力以テ希臘問

題ヲ決定センコトヲ恐ル、自國ハ同時ニ露帝モ亦  
英國ハ自國ニ詢ラスシテ自國問題ヲ決定センコ  
トヲ恐レリト虽此而モ露帝ハ陽ニ之ニ留意  
セサルノ状ヲ極ニ露國ハ決シテ叛民ニ為  
其埃ヲ仮スコト能ハスト揚言セリ其正然リ其  
始ノ主トシテ希臘革命ヲ煽動セシハ露國ニ  
シテ其全力ヲ盡クシテ露國ハ此ノ運動ニ反對  
セシメ今ヤ英國ハ却テ露國ニ向フテ其希臘問題  
ヲ不向ニ付スル勿ラムコトヲ懇請スルニ至シ  
リ外交ノ事態ニ變幻端ヲキ信ニ奇觀ト謂フヘ  
キナリ既ニウエリントシハ露帝ト俱ニ反覆  
商談ヲ尽シタハ後露帝ハ遂ニ其言ニ聽從シ千  
八百二十六年四月四日聖彼得堡ニ於テ英露



間ニ一ツ、議定書ヲ作りテソ、調印ヲ交換セ  
右ノ議定書ハ希臘ノ独立ニ関スル事項ヲ歐羅  
巴ニ於テ始メテ外交上ノ協商ニ付セシ者ニシ  
テ其ノ載スル所ハ露國ハ土耳其格希臘ノ紛争ヲ  
英國ノ仲裁ニ付スルコトヲ承認シ且ツ其ノ手  
段方法ニ就キテハ他日更ニ協議ヲ尽クシテ務  
メテ英國ノ措置ヲ幫助シ二國ハ希臘ノ為メニ  
其ノ自治ヲ請求シ希臘ヲ以テ單ニ土耳其格ノ附  
庸國トシ自ラ其ノ國長ヲ選定シテ土廷ノ認  
可ヲ得ルニ止ムヘキ者トシ本條約ハ露國ト土  
耳格帝國トノ關係如何ニ拘ハラズシテ必  
之ヲ遵守スヘキモノトシ兩條約國ハ希臘ノ全

ク平靜ニ帰シタル後モ歐洲中他列國亦相俱  
ニ享有スヘキ者トシ外決シテ土地又ハ商業ニ関  
シテ其ノ利益ヲ独占スルコトヲ得ルカチテ  
ナレ而シテ將來、於テハ希臘ノ治安ヲ保障ス  
ル事件ニ就キテ英國自ラ其ノ任ヲ當ラシムコト  
ニ其ノ國ハ政制ニ於テ許ス所アラザルヲ以  
テ宜シク之ヲ他列國ニ強大國ニ依頼スルコト為セ  
ルカニシテ右ノ議定書ノ調印ヲ任ズルニ聞  
キテ大ニ喜ビ露國ハ此ノ一事ニ由リテ全林  
國ト分離シテ英國ノ政策ニ協賛スルニ至リ  
ル者ナリト思料セリ

四月四日 第三卷 及ビアツシマン條約



四月四日ノ議定書ハ固ク之ヲ秘蔵ニ附シ兩條  
約國ハ數月ヲ経タレ後チ始メ之ヲ世ニ公ニ  
スリ是レ他ナシ君レ此ノ英露ノ協商ヲ以テ確  
定動カスヘカラサル者トスルトキハ土耳其格政  
府ハ復シ具ノ策ノ施マヘキ者ナキヲ知リテ露  
國ノ談判ニ應スルヲ拒絶シ失望ノ極ニ兵力  
ニ由リテ抵抗ヲ試ミルニ至ルニ至ルニ以  
テ土耳其大臣ヲシテ始メ具ノ協商ノ成立セシ  
事實ヲ知ラシムルコトナク唯ダ英露ノ間ニ將  
ニ此ノ如キ協商ヲ遂ケントスルハ勢アルヲ示  
シ以テ土耳其ノ脅迫マレノ一手段ト爲シ土耳其  
君レ露國ト俱ニ戰ヲ開クトキハ英國ノ援ヲ得  
ルハ望ナキモ君レ之ト相和シテ具ノ要求ヲ容

ルトキハ英國ハ復シ希臘ヲ爲メ調停ヲ料  
ルニ意ナキ者ト思料セシムルニ君カサレ故  
ナリ當時ノテルニハ聖彼得堡ニ於ケル英  
露ノ協商ニ就キテ其ノ詳ナク知ラズシテ深  
ク之ヲ意ニ介スルコトナク土耳其レ露國ノ  
要求ヲ容レシムルモ復シ一モ恐レハ是レ者  
アラズト思料シ露王ノ向ニ一タレ戰ヲ開クト  
キハ唯ダバカシキ島ヲ擾乱スルノニナラ  
ズ具ノ餘波施キテ澳國及ヒ中央歐羅巴ニ及ス  
ルノ恐アルヲ以テ極力之ヲ未然ニ防止セシト  
欲シ切ニ土耳其ノ向フニ露國ノ要求ニ應セシコ  
トヲ勸告セリ  
トテハニハ其ノ功空ニカラスニキ



耳格、外務大臣、露國ノ代理公使ニシヤキ  
一、定メタル期限ニ至リ上帝ハ露帝ヨリ提出  
セル協定案ノ大体ヲ承認セル旨ヲミンシヤキ  
一、通知シセルヴィヤノ代淺士ノ監禁ヲ釈シ  
ガニユーロブ沿岸ノ公領地ニ屯セル軍隊ヲ撤去  
シ且ツ二人ノ全權大使ヲ露境ニ派遣シテ露國  
ノ全權ハオロンツフ及リポーピエールト俱  
ニ確定條約ヲ訂結スルノ談判ヲ開カレムヘキ  
ヲ約シタリ  
夫レ此ノ如ク上帝ハ容易ニ露國ノ意思ニ服従  
スルニ至リタルハ他ニ慮ル所ナクムハア  
ラス蓋シ上帝マムトド、其ノ人ト爲リ強暴ニ  
シテ憤激シ易ク而カモ其怒ニテ露國ニ屈スル

アアリキハ其時機ヲ待テ大ニ其ノ怒ヲ雪  
ガント欲スルヲ爲シテ帝ハ露國ノ早晚必ス  
希臘ノ事ニ干涉スルノ意アルヲ察シ唯テ務  
ク時日ヲ遷延シ其ノ向大ニ軍備ヲ擴張ヲ計リ  
以テ露國ト俱ニ一大決戦ヲ試ミルヲ準備ヲ調  
ヘント計リタルナリ故ニ其ノ露國ノ要求ヲ承  
認スルノ後ヲ即時ニ歐洲ヨリ兵式ニ則リテ其ノ  
民兵ヲ編成ヲ改正スルヲ勅令ヲ發シ(千八百二  
十六年五月二十八日)又當時露國ト波斯トノ間  
ニ將ニ葛藤ヲ惹起セントスル状アルヲ視テ竊  
カニ波斯政府ヲ煽動シテ露國ニ抵抗セシメ之  
ニ由リテ大ニ自國ニ利スル所アルト思料  
セリ故ニ其ノ事ヲ



然レモ土帝、此ノ心算、悉ク畫餅ニ属シ具、  
兵制ノ改革ハ適、具ノ親衛隊ノ叛乱ヲ招致シ  
具ノ餘波施キテ国内各地ノ軍隊ニ及ホシ遂ニ  
悉ク之ヲ解散セサレハカウサレニ至リ是ノ時  
ニ至ル迄土帝ハ寡クトモ不規律不整頓ナル軍  
隊ヲ有シタリ而シテ今ヤ殆ント一兵ガモ有セザ  
ルニ至レリ而シテ土帝ハ百方其ノ力ヲ竭シテ  
新タニ軍隊ノ编制ニ着手シタレモ固ヨリ一朝  
夕、之ヲ能ク成就スヘキニアラス將タ露國ト  
波斯ト、間ニ果シテ土帝ノ希望セシカ如ク  
同年七月遂ニ戦ヲ開クニ至リタルニ露國ノ具  
ノ能ク一舉シテ全勝ヲ得ルノ望ナキヲ見テ假  
ニ姑ク其兵ヲ戢シ以テ再ヒ具ノ時機ノ到ルヲ

待テ事變ヲ生レバ如何ニ對シテ應ジテ  
露帝ハ全權委員ハ土耳其政府ノ今ヤ困頓ノ為メ  
ナキノ地位ニ陥リタルヲ視テ益々過大ノ要求  
ヲ為シ具ノ談判ハ八月一日以降露領アツケル  
マンニ於テ之ヲ開キタリシガ土耳其ハ全權委  
員ハ主トシテ露國ノ要求セル商業上ノ特權ヲ  
与フヘコトヲ拒シ露國ハビニシヤレストノ條  
約以來不當ノ占領ヲ為セシ黒海沿岸ノ城壘ヲ  
保有センコトヲ主張スルヲ理ナキヲ争ヒ彼我  
ノ辯論難語久シキニ隔リテ容易ニ決スヘコト  
能ハス既ニ之ニ具ノ翌九月ニ至リ露國ハ全權  
委員突如トシテ土耳其格委員ヲ向テ其ノ要求ニ係  
ル各般ノ條件ハ一モ変更ヲ容サ、此旨ヲ宣言



土耳其委員、シテ君シ十月七日、至ルマデニ  
其ノ提議ヲ承認スルコト能ハズシバ、彼我、決  
判ハ不調ニ歸スヘキヲ告ケリ、當時土耳其、他  
ノ具ハ援助ヲ仰グノ國ナクシテ、露國ノ言ニ服  
シ、以テ遂ニ露國委員ノ指定シタル期日ヲ以テ  
露土ノ間ニ一ノ新條約ヲ訂結セリ、此ノ條約タ  
ル露國ノ先帝亞歷山一世カ多年之ヲ切望シテ  
而シテ遂ニ具ノ實行ヲ見ル能ハサリシ者ナリ  
アツケルマシ、條約ニビニヤレヌ、條約ノ  
全部ヲ確認シ、又千八百二年土耳其帝、勅令ヲ  
以テ認許シタルモ、ルタウイリ及ヴウシ、特  
權ヲ確認シ土耳其政府、従前、如ク此ノ二列

ノ知事ヲ專ラフアナト、居住セシ貴族中ヨリ  
リ任用セマス、シテ兩州内ニ居住セル貴族中ヨリ  
任用スヘキモノトシセリ、ヤハ十八ヶ月以内  
ニ嘗テ王廷ヨリ約シタル憲法ヲ施行スヘキモ  
ノトシ露帝ハ血細亞ニ於テ其ノ當時露兵ヲ占  
領シタル土地ヲ保有スヘキモノトシ、露土兩國  
ノ混交委員會ヲ設ケテ兩國ノ疆界ニ住シタル  
臣民ノ訴訟ヲ裁判スルノ法ヲ定メ、王廷ハ露國  
ノ臣民ニ自國ノ海賊<sup>賊</sup>ノ為メニ受ケタル損害  
ヲ賠償シ、且ツ將來嚴ニ海賊<sup>賊</sup>ノ奪掠ヲ禁遏スヘ  
キヲ約シ、露人ノ土國ノ領海及ニ港灣ニ於テ完  
全ナル商業ヲ自由ヲ有スヘキ者トシ、而シテ土  
耳格人ノ之カ為メ露人ニ對シテ一モ特典ヲ



有スルコトヲ得ス土産ハ又露帝ノ勸告ヲ容レ  
テ自餘ノ諸國ヲシテ新クニ其ノ商船ヲ黒海ノ  
内ニ入ラシムヘキヲ約シタリ  
右ニ記シタル本條約ノ外更ニ二種ノ附帶條約  
ヲ訂結セリ即チ其一ハモルタヴァイリ及ヒヴ  
ラシリノ公領地ニ関スル者ニシテ其ノ知事ノ  
任期ヲ七年ト定メ地方ノ貴族中ヨリ選舉シテ  
土産ノ承認ヲ受ケ而シテ露國ノ承諾ヲ得ガレ  
ハ之ヲ罷免スルヲ得ヘカラストナシ其ノ租稅  
ノ賦課法ハ露土二國ノ委員立合ノ上地方官廳  
ニ於テ之ヲ定ムヘキ者トシ其ノ商業ノ自由ハ  
一切妨碍ヲ加フヘカラストシ千八百二年土帝  
ノ敕令ヲ以テ定メタル租稅ハ二年向之ヲ免除

スヘシ等ノ事項ヲ規定セリ其ノ二ハ專ラセル  
ビヤニ関スル者ニシテ土耳其政府ニセルビヤ  
ノ代議士ト協議シテ同國ニ於ケル信教ノ自由  
具ノ國長ノ選擇其ノ行政ノ獨立ヲ確保シ其ノ  
租稅ノ教種ニ分シタル者ヲ各シテ一種トナシ從  
未回教徒ニ屬シタル財產ヲセルビヤノ有ニ歸  
シテ其ノ收入ノ一部ヲ租稅ト俱ニ土耳其政府  
ニ納付セシメ商業ノ自由ヲ皇張シテセルビヤ  
商人ノ自由ニ土耳其國內ニ旅行スルヲ許シ又  
病院學校活版匠等ヲ設立スルヲ許シ守備兵ヲ  
除ク外ニ回教徒ノセルビヤニ住居スルヲ禁  
スル等ノ事項ヲ規定シタリ見ルベシ此等ノ特  
典ニ依リテセルビヤニ亦殆ドセルビヤガヴァイ及ビ



ヴラシール、等レキ自治ノ權利ヲ得ルニ至レル  
コトヲ  
アツケルマシノ、条約ニ由リテカンニング、露  
土ノ内戦ヲ防止スルヲ得タリ憶フニ彼レハ姑  
ク此ノ結果ヲ得タルニ満足セシナラン然レ氏  
四月四日ノ議定書ハ彼レカ為メニハ元来一時  
ノ權畧ニ過キズ故ニ此ノ議定書ニ由リ露帝カ  
英國ノ同意ヲ得スレテ恣ニ希臘問題ヲ決定ス  
ルコト能ハサルニ至リタルハカンニング、喜  
フアナリト虽レ彼レハ初メヨリ露帝カ英國ト  
俱ニ談向點ヲ決定スルノ名譽、利益ト分ツ  
コトヲ願ハス是ヲ以テ彼レハ其ノ議定書ニ載  
セタルノ事項ヲ實行スルノ方法ハ他日更ニ協

議ヲ尽スヘシトナシ仍テ故ラニ其ノ協議ヲ兩  
クノ時期ヲ遷延シ其ノ間土耳其及希臘ヲシ  
テ英國ヨリ提示シタル調停案ヲ採容セシメム  
ト欲シ千八百二十六年九月ニ至リテ始メテ露  
國政府ニ向フテ議定書ノ実行ニ着手スヘキヲ  
通告シ而シテ土耳其兩國ノ干涉ヲ拒絶シタル  
場合ニハ唯ダ兩國俱ニ其ノ君士坦丁堡駐劄ノ  
全權大使ヲ召還シ又自餘ノ列國ヲ勸誘シテ均  
シク其ノ大使ニ召還ノ命ヲ傳ヘシメ此ノ如ク  
シテ土耳其尚ホ二國ノ提議ヲ容レサルトキハ希  
臘ノ独立ニ公認ヲ与フヘキヲ聲言シテ之ヲ脅  
カスヘシト言ヘリ然レモカニンニングハ初メヨ  
リ列國中ニ就キテ寡クトモ英國ヲミハ必ズ



其ノ勸誘ニ應シテ其ノ大使ヲ召遣セザルヲ察  
シ又露帝ノ容易ニ希臘ノ独立ニ公認ヲ與フル  
コトヲ肯ゼザルヲ知リテ故ラニ此ノ如キ提議  
ヲ為シタリシナリ

權

且ツカンニングガ務メテ希臘問題ヲ遷延シテ  
東政ノ紛擾ヲ避ケムト欲シタルハ他ニ其ノ原  
因ノ存スル者アリ他ナシ當時イベリツク半島  
ニ於テ重大ノ事變アリテカンニングガ專ラ其  
ノ意ヲ之ニ注キシカ故ナリ是ヨリ先キ英國カ  
葡萄牙ニ於テ其ノ多年保有シタル勢力ヲ失墜  
シタル後千八百二十五年ヲ始メニ方リ再ヒ之

ク回復スルニ至リタルハ既ニ前章ニ記述セタ  
ルカ如シ然ルニ千八百二十六年三月十日葡  
牙王ジョージ第六世ノ崩殂ニシタル後英國ノ同國  
於テハ勢力ハ復タ又大ニ衰微シ色ヲ呈スルニ  
至リ今其ノ事由ヲ示サシニジョージ第六世ニ  
人ノ子アリ長子ドンペドロト正當ニ葡萄牙  
ノ王位ヲ継紹スヘキ權利ヲ有セリト臣ハ其ノ  
前キニ巴西ノ帝位ニ即キシ以來葡萄牙人ハ概  
テ之ヲ以テ其ノ本國ニ背叛セシ者トシ其ノ勇  
ドン、ミゲル、ラシテ王位ヲ継紹セシムヘシト  
主張シ而シテドン、ミゲルハ其ノ夙トニ專制  
完及ヒ旧教党ニ推戴セラレタルノ故ニ由リ其ノ  
伯父タル西班牙王フエルナンド第七世ニ亦之



之ヲ授ケテ王位ニ即カシメムコトヲ望ムリ然  
ルニフエルデナンドモ古ハ專ラ佛國ノ援助ヲ  
得具ノ銃劔ノ力ニ由リテ王位ヲ保有セハ者ナ  
ルカ故ニドンミゲールモ亦又ズ佛國守旧党ノ  
歡心ヲ得テ佛國政府ノ援助ヲ受クヘキハ言ヲ  
待タス且ソドンミゲールハ十餘年間維納ニ在  
リテ朝夕メテハニツヒニ親炙シ以テ其ノ專制  
説ノ感化ヲ受ケタハカ故ニ佛國政府モ亦必マ  
之ヲ援ケテ王位ヲ得セシメムコトヲ願ハザル  
ヘカラスカニンングハ夙トニ佛國ニ國ノ意向  
又此ノ如クナクヲ知レリ故ニドンミゲール  
シテ葡萄牙ノ王位ニ即カシムルヲ欲セス專ラ  
同國ニ於ケル立憲党ノ勢力ヲ扶植シ之ヲシテ

多年英國ニ親交ス有スルドンミゲールハ奉  
テドンミゲールハ及對モシメムコトヲ計シテ  
然レドモカニンングハ敢テドミゲールヲ  
テ葡萄牙ノ王位ト巴西ノ帝位トヲ其ノ一身ニ  
兼有セシメムト欲レタスニアラサ他ナリ此ノ  
如キハ固ヨリ英國ノ利益ニアラサレハナリ故  
ニカニンングハ其ノ能ク兩國ノ合一ヲ防止ス  
ルト同時ニ亦能クリスボト又ニ於ケル非英國  
党ノ勢力ヲ挫クヘキ一種ノ方畧ヲ案出シドン  
ペドロトミゲールトニ一身分ニテ西洋ヲ降テタ  
ル兩國ヲ統治スルノ困難ナル界以テ以テシ  
ドンペドロト男女ニ人シ子アララ以テ其ノ男  
ヲシテ巴西帝位ヲ継承セシメ其ノ女トナトマ



リヤラドン、ミゲール、要ハレテ之ニ葡萄牙ノ  
王位ヲ譲リ、仍テ以テドン、ミゲールノ野心ニ満  
足ヲ与ヘ而シテ之ト同時ニドン、ミゲールヲシ  
テ旧教党ヨリ分離セシメ、又西班牙王フエルナ  
ナンド七世及ニ佛王シヤル、十世ヨリ分離セ  
シメテ専ラ憲法党即チ英國党ノ勢力ニ依頼セ  
シムルカ為メ葡萄牙ニ於テ新タニ議院制度ヲ  
設クヘシトナセリ是ニ於テ新カニンガ、密カ  
ニチヤークレス、スチエアルトナル者ヲ巴西ニ  
送りドン、ペドロ、説クニ以上ノ事ヲ以テシ  
クルニドン、ペドロハ容易ク其ノ言ヲ採ニ聽  
從レ、今八百二十六年四月ノ末ヨリ五月始メ  
ニ巨斗具其方策ニ実行ニ着手シ先ク葡萄牙

ニ向フニ嘗テ路易十八世ハ佛國ニ与ヘクル下  
同一ナル憲法ヲ与ヘ、次チテ王女ドナトマリヤ  
ノ為メニ自ラ葡萄牙ノ王位ニ即ケル權利ヲ抛  
棄シテ王女ラドン、ミゲールニ要スルニ令テ下  
ミゲールニ傳ヘテ新憲法ヲ承認セ且ツリカ、  
シヤ子ロリス、末リテ親シク其ヲ訓令ヲ受ク  
キヲ命シタリ、其ノ言ハ、  
顧ラニ以上ノ方策ハ人之言フニ甚ク易クモ  
テ行フニ極シテ難シ、是ヨリ先キ先王シヤル  
古ノ女イザベラ、其ノ父ノ死後攝政ニ任レ  
同年七月憲法ヲ奏布シテ必ス之ヲ遵守スヘキ  
又夫ハリ然ルニアマラントリ統率ヤ、旧教党  
ハドン、ミゲールヲ以テ正当ナル王位ニ相續者



トナレ仍テ其ノ名義ヲ依リテ叛乱ヲ起シ屢官  
兵ト戦フテ其ノ破ル所トナリ而シテ其敗ヲ取  
ル毎ニ逃レテ西班牙ノ境内ニ走リ然ルニフ  
ルハゲナンド七古ハ帝ニ之ヲ援護シテ再挙ヲ  
計ルノ便ヲ与ヘ之レカ为メ葡萄牙政府ノ活向  
ヲ受クルモ自ラ其ノ使者ヲ迎見スルヲ拒ミ且  
ツ告ルニ実ヲ以テモズマドリツド駐在ノ英國  
全權大使チヤールレス、ランブモ亦荐リニ之ニ説  
クニ公法ノ規定ヲ遵守スベキヲ以テスルモ曾  
テ其ノ言ヲ察ラ肯カス加フルニ仏國全權大使  
ムリスチエーハ其ノ首相ヴィエーリヨリ西班  
牙王ニ對シテ英國大使ト同一ノ忠告ヲ為スヘ  
キ旨ヲ訓令セラレタリト拘ハラス密カニ西班

牙王ノ葡萄牙ニ對スル不良ノ措置ヲ德意ニ以  
テ守旧党ノ謹心ヲ得シコト又務シテ之ヲ要ス  
ルニフエルゲナンド七古ハ葡萄牙ニ於ケル五  
憲党ノ勢力ヲ施キテ自國ニ波及セシムルヲ恐  
レ葡萄牙ニ對シ嘗テ仏國カ千八百二十年及ヒ  
二十三年ヲ以テ西班牙ニ施シタリト同一ノ政  
策ヲ施サント欲シ而シテ葡萄牙ノ國會ガ其ノ  
背後ニ英國ノ強援ヲ有シタルヲ慮カスニ及  
ガリキ  
然レ氏カニシテ此ノ時ニ至ルマデ敢テ公  
然ノ前蓋ヲ事ニ干渉スルノ意ナリシニアラヌ  
是レ他ノ神聖同盟カ此ノ機ニ乘シテ再ト具  
ノ頭ヲ握テ以テ英國ニ敵對スルニ至ラヒコト



ヲ慮リシカ故ナリ彼レハ其ノ年九月巴里ニ来  
リテ仏國首相ヴイエールニ會見セシニヴイエ  
ールハ之ニ告ルニ其ノ他意ナキヲ以テシタル  
モ而モカンニングハヴイエールガ千八百二十  
三年ニ於ケルカ如ク守旧党ノ迫ル界トナリシ  
其ノ志ヲ動カスニ至ルヘキヲ知シリ且ツボン  
ミゲールハ今猶ホ維納ニ在リテ朝夕ソテルニ  
ツクニ親炙シ其ノ既ニ葡葡牙ノ新憲法ヲ承認  
シドナリマリアトノ結婚ヲ諾シタルニ係ハラ  
ス高ホ其ノ自ラ王位ヲ詔クノ望ミヲ捨テスシ  
テ必ス瓊國政府ノ援ヲ得ヘキヲ信シ吾國ハ是  
ノ時ニ於テモ終始瓊國ノ政策ニ盲從シテ之ト  
相離ルヲ欲セズ乃チ諸強大國ノ中具ル能ク

カンニングノ政策ニ同意ヲ表スヘキ者ハ唯ダ  
一ノ露國アルニ而モ其ノ國長ハ固ク專制者  
義ヲ把持シテ移ラサル者ナリ但ダ哥拉士帝ハ  
カンニングト均シク能ク機ニ臨ニ変ニ應ル  
コトヲ知シリ故ニ帝ハ英國政府カリスポル  
ニ於テ其ノ平生嫌惡スル議院制度ヲ扶植スル  
ヲ視ルモ敢テ之ヲ咎ムルコトナク明カクイベ  
リツク丰島ニ於ケル英國ノ政策ニ協賛ヲ与フ  
ヘキヲ宣言シマドリツド駐屯ノ露國大使ニ与  
フルニ英國政府ガ其ノ大使ランプニ与ヘタル  
ト同一ノ訓令ヲ以テシ英國カ葡葡牙ニ於テ其  
ノ勢力ヲ伸暢スルハ必スシモ不當ノ事ニアラ  
ザルヲ承認セリ



然レテ露帝ハ之ト同時ニ露國カ土耳其帝國ニ  
對シテ其ノ勢力ヲ伸暢スルコト格モ英國ノ葡  
萄牙ニ於ケルカ如クナランコトヲ主張セリ帝  
ノ此ノ言タル奇モ自ラ得ル所ナクニハ亦必ズ  
与フル所ナカルヘキノ意ヲ示シタル者ニシテ  
帝カ葡萄牙ニ於ケルカニニング、政策ヲ幫助  
セント欲シタルハ主トシテ之ニ對スル報酬ヲ  
復ント欲スルカ爲メ外ナラス現ニ帝ハ此ノ  
時ヲ以テ四月四日ノ議定書ヲ実行スルノ件ニ  
就キニ英國ヨリ提議セシ所ニ答ヘテ自ラ一個  
ノ方策ヲ提出シ以テ其ノ輕シクカニニングノ  
欺ヲ採トナラザルヲ明カニセリ其ノ言ニ曰ク  
既ニ兩國相合シテ土耳其格ト希臘トノ間ノ調停

スヘシト言フ所ニ必要ノ場合ニ至ラハ二國ノ  
強制シテ其ノ言フ所ニ從ハレノサルベカラズ  
勸告敢カレズンバ之ニ次クニ脅迫ヲ以テシ脅  
迫効ナクンバ更ニ之ニ次クニ實行ヲ以テセサ  
ルヘカラス』ト要スルニ帝ノ意見ハ極端ニ至ル  
マデ其ノ干渉ニ進ムルニ在リカニニング敢  
テ帝ハ此ノ提議ヲ拒ムコト能ハス十一月二十  
日倫敦駐在ノ露國全權大使リトヴ正ト俱ニ  
諸大國ニ向テ公然下記ノ如キ通知ヲ為スヘ  
キ旨ヲ決議シタリ云ク英露ノ二國ハ諸大國ノ  
協賛ヲ得ルト否ト拘ハラヌニテ其ノ議定シ  
タル所ヲ実行シ必要ノ場合ニハ兵力ヲ用ヒテ  
土耳其格及ヒ希臘ヲ強制シ之ヲシテ先ツ休戦ヲ



為ナシメテ更ニ四月四日ノ議定書、揭  
クハ備和條件ヲ承認セシメシコトヲ力ムヘシ  
トカシニシテ露帝ニ此ノ讓歩ヲ為シタルガ  
為メ葡萄牙ニ對シテ思ハレテ終ニ干涉ヲ為シ已ム  
ナクシハ兵力ヲ用ウルモ亦一モ顧慮マレズ  
キニ至リテ恰モ好シ當時葡萄牙ノ旧政黨ニ更  
ニ西班牙政府ノ庇護ヲ得テ大卒シテ政府ニ迫  
リ攝政官ニ條約ニ本キテ英國ニ兵力ヲ援ヲ得  
ンコトヲ要求シタルヲ以テカンニシテ遂ニ  
断然意ヲ決シテ一萬ノ兵士ヲリスボリ又ニ送  
リタルニ佛國ハ英國カ露國ノ協賛ヲ得タルヲ  
視テ具ノ為メ平ノ傍觀シテ敢テ之ヲ支ヘサル  
ノミナラス首相ヱイエールハマドリッド駐劄

、仏國大使ムーヌチエールヲ以テ具ノ權限ヲ踰  
越シタル者トシテ之ヲ召還シ葡萄牙ノ旧政黨  
ハ英國ノ兵威ニ怕シテ四方ニ潰散シ西班牙政  
府ハ兵ヲ葡萄牙ノ國境ニ出シテ示威運動ヲ試  
ミタルモ久シカラズシテ具ノ兵ヲ撤退シ葡  
牙ノ政權ニ舉テ憲法党ノ掌中歸シテ  
觀ヲ呈シタリ  
其五 希臘問題及倫敦條約  
此ノ間四月四日ノ議定書ハ英露二國ヨリ之  
ヲ歐洲列國ニ通知シタルニ其ノ向フテ異論  
唱フル者少ナカラズ斐國ハ十二月ニ異論  
以テ二國ニ答フルニ叛徒ノ請求ニ本キテ調停  
ヲ行フハ不可ナシヲ以テ希臘ヲ鎮定スルハ



唯ク上帝ノ自由ノ意思ニ本キ其ノ視ニ希臘人  
ノ幸福ヲ増進スヘシト做セシ制度ヲ設クルニ  
外ナラヌト主張シ普國政府ハ終始神聖同盟ノ  
君主正統論ヲ把持シテ亦殆ト墮國ト同一ノ説  
ヲ主張シ而シテ仏國ハ之ト全ク其ノ趣ヲ異ニ  
シ首相ヴイエールハ狐疑シテ決スル所アラハ  
リシモ輿論ハ大ニ希臘ノ独立ニ同情ヲ表シ加  
フルニ露國ハ荐リニ仏國政府ニ説クニ佛國モ  
亦希臘問題ヲ決定スルノ議ニ加ハリテ英國ノ  
專權ヲ抑フルノ得策タル所以テ以テ英國モ  
亦仏國ノ勢力ヲ仮リテ露國ノ勢力ヲ控制セシ  
ト欲シタルヲ以テ仏國政府ハ遂ニ其ノ勳カス  
所トナリテ唯ダニ英露間ノ議定書ヲ排斥セカ

ルノミナラス更ニ之ヲ改メテ英露仏三國ノ同  
盟條約トナシ以テ相俱ニ東方ノ平和ヲ回復セ  
シコトヲ要求セシニ英露ノ二國ハ容易ク其ノ  
請求ニ應ジタルヲ以テ餘ス所ハ唯タ其ノ共同  
運動ヲ實行スヘキ細目ニ涉ルル問題ニ過キザ  
リキト其ノ主眼ニ在リテ其ノ結果ニ至ルニ  
是ノ時ニ方リ墮相又テルニツキ其ノ畫策ス  
ルニ兵着々失敗ニ歸シ其ノ老望大ニ昔日ニ減ス  
ルニ至リタルモ彼レハ尚夫屈スルコトナク先  
ツ仏國ヲ説キテ既ニ希臘國ヲ一ノ獨立國トナ  
シタルノ後締盟國ニ宜ヒク相約シテ將來土耳  
格帝國ニ為タニ完全ナル存立ヲ保障セサズ  
カラストト提議スナシコトヲ計ルリ然レド



露國ハ豫メ此ノ類ノ提議ヲ防止スルカ爲メ明  
カニ宣言ヲ發シテ言ヘリ露國ハ固ヨリ土耳其  
帝國ヲ討滅スルノ意ナシト雖モ亦敢テ之ヲ保  
護シテ其ノ存立ヲ全クセシムルヲ約スルコト  
能ハストメテハニツク其ノ策ノ行ハレサレ  
テ視テ又新古ニ一策ヲ按出シ英露佛奧普ノ五  
大強國ハ會議ヲ倫敦ニ開キテ希臘問題ヲ協定  
スヘキヲ主張シ而シテ此ノ提議ハ或ハ具ノ實  
行ヲ視ルノ望ナキニアラサリキ何トナレハ當  
時英國ニ於テハリパーヴール及ビ内政ニ  
トシテ獨立ヲ得セシムルヲ好マズ故ラニ列國  
ノ間ニ無用ノ交渉談判ヲ開キテ具ハ時日ヲ遷

延セシコトヲ欲セタレハテリ不幸ニシテ意外  
ノ事變ハメテハニツク大敵タルカニニシテ  
シテ英國ノ政權ヲ統ブレ至ラシメタルカ爲  
メ此ノ策モ亦遂ニ畫餅ニ屬シタリ英國首相リ  
パーヴール卿ハ恰モ此ノ時ヲ以テ急ニ中凡  
病ニテ其ノ職ヲ退キ千八百二十七年四月十日  
カンニンググハ代リテ首相ノ任ニ就キシカ是  
リ先キカニニシテ漸ク保守主義ヲ捨テ自  
由主義ニ傾キ國中ノ輿論モ亦切リニ全歐洲  
於テ自由主義ヲ扶植スヘキヲ主張シテ其ノ政  
策ヲ鼓舞シ加フニ具ノ内閣員中ニ固ク  
保守主義ヲ把持シタル内閣員トシテ  
ン、ピール等ノ諸人ニカンニンググハ相ニ戴キテ



○英國の閣接ニ希  
臘ニ於テ

其ノ命令ヲ奉スルコトヲ肯セズ相率ヒテ其ノ  
職ヲ去リシヨリカニニシテ他ノ掣肘ヲ免  
シテ益々其ノ決心ヲ固クシ遂ニ時機ヲ待テ希  
臘ヲ純然タル一ノ獨立國トナシ英政府先ツ之  
ニ公認ヲ与ヘシコトヲ計シリ  
且ツ英仏露ノ三國間ニ同盟條約ヲ訂結シタル  
ヲチ三國ハ互ニ其ノ猜疑ヲ念ヲ長シ各他ノ二  
國カ希臘ニ於テ独リ其ノ勢力ヲ占有セシコト  
ヲ怕ルルノ情ニ勝ラズ能ハヌ是ノ時ニ方  
革命党ノ軍隊ヲ指揮シエルミカトスル國會  
ニ英國人チヤルチ及ヒコクラトスル二人ヲ舉  
ゲテ其ノ一ヲ陸軍總督トナシ其ノ二ヲ海軍總  
督トナセリ之ニ及シテ露國ハ專ラ其ノ政治上

ノ權力ヲ掌握シ國會ヲシテ新ニ一ノ憲法ヲ制  
定セシメ又カポリヂストリアヲ召集シテ之ヲ  
共和大統領ニ推選セシメテ獨リ仏國ノミハ  
一ニ自ラ得ル所ニテ只管ラ時機ヲ察シテ其ノ  
勢力ノ回復ヲ計ルル外アラザリキ  
要スルニ三國政府ハ相俱ニ力ヲ合セテ速ニ  
其ノ干渉ノ方策ヲ実行セント欲シ英國政府ハ  
其ノ始メ自國一己ノ名義ヲ以テ調停案ヲ提出  
シ提出セシモノ千八百二十七年二月ニ至ルマテ  
未ダ土廷ノ聽ヲ得ナク既ニ露國ノ全  
權大使リボトピエールモ亦君士坦丁堡ニ来リ  
タルヲ以テ英露二國ノ大使ハ去年四月四日ノ  
議定書ニ於テ協定セシ事項ヲ公然土廷ニ通告



シタリ然レ其大臣ハ終始奥國ニ煽動セ  
ラニ其ノ回答ヲ与フルコトヲ遷延シ以テレツ  
シルトバシヤノ率ビタル土耳其兵カアテ  
ク陥ル、ノ時ヲ俟テリ是ヨリ先キ千八百二十  
六年八月以降土耳其格兵ノ為メニ合圍セラレタ  
ルミソロンギハ遂ニ其ノ力支フルコト能ハ  
スレテ降ヲ容レ次ヒテ千八百二十七年六月ニ  
至リテアテノ又モ亦終ニ土耳其格軍ノ陥ル、平  
トシリ是ニ於テ土耳其格政府ハ復々急ニ其ノ意  
ヲ強クシ英露二國ノ大使ガ屢々其ノ回答ヲ促  
ガスヤ乃チ之ニ答ヘテ言ハリ上帝ハ其ノ臣民  
トノ關係ニ就キテ断シテ他國ノ容喙ヲ許スコ  
ト能ハスト

英露ノ二國カ土耳其具ノ要求ヲ拒絶シタル公  
文ニ接スルヤ英露仏ノ三國ハ即時ニ同盟條約  
ヲ訂結セリ是ノ時ニ方リ希臘ハ其ノ勢力既ニ  
衰弊ノ極ニ達シ加フルニ内ニ存リテハ各派分  
裂シテ交々争鬪ヲ事トシ一日モ其ノ救援ヲ緩  
フスヘカラス故ヲ以テ英露仏ノ三國間ニ於テ  
久シク交渉談判中ナリシ同盟條約ハ遂ニ千八  
百二十七年七月六日倫敦ニ於テ之カ調印ヲ終  
ハリ其ノ初メノ神聖同盟ノ為メニ彼レカ如ク冷  
遇輕侮ヲ受ケ而モ其ノ勇敢義烈ニ由リテ大ニ  
歐洲諸國ノ同情ヲ得タル希臘國民ハ此ノ時ヲ  
以テ始メテ其ノ独立ヲ保チ其ノ生存ヲ全クス  
ルノ望ヲ繫ゴコトヲ得タリ是レ他ナシ神聖同



盟中ノ三大強國ハ遂ニ意ヲ決シテ之ニ援助ヲ  
与フルニ至リタレハナリ  
同盟条約ニ於テハ締盟ノ三國カ土耳其格ト希臘  
ト、交戦ノ為ニ其ノ商業ヲ妨害セラレハ、ヲ  
制止スルノ須要ナルヲ述ヘ人道ノ大義ニ於テ  
希臘人ノ窮迫ヲ傍觀スルコト能ハサルヲ説キ  
希臘政府ヨリ締盟國ノ英佛二國ニ向ヒ累リニ  
救援ヲ求メタレハ揚々而シテ其ノ擾乱ヲ鎮定  
スル大體ノ條件ハ畧シ四月四日ノ英露間ノ議  
定ニ同シク其ノ之ヲ實行スル方法ニ就キテハ  
別ニ秘密ノ条文アリテ最初先ツ三國協同シテ  
土廷ニ調停ノ議ヲ提出シ土廷若シ之ヲ拒絶シ  
タルトキハ十五日乃至一ヶ月ノ期限内ニ更ニ

土廷ニ向フテ三國ハ希臘ノ主要ノ市府ヲ其ノ  
領事ヲ割在セシメ且ツ兵力ヲ以テ西交戦國ニ  
休戦ヲ為サシムルコトヲ通知スヘシト定メタ  
リ  
此ノ条約タル明カニ革命旨義ノ全勝ヲ示シタ  
ル者ニシテ歐洲列國ハ嘗テ革命旨義ヲ排撃ス  
ルニ其ノ全力ヲ傾注シタル英露仏ノ三國ガ今  
ヤ翻テ此ノ如キ条約ヲ訂結シタルヲ視テ驚愕  
措クコト能ハス而シテ神聖同盟ガ之ニ由リテ  
大打撃ヲ被リタルハ蓋シ亦疑ヲ容ルヘキニア  
ラス  
倫敦条約ハ八月初旬ニ至リテ訂盟三國ヨリ之  
ヲ希臘政府ニ通知シタルニ希臘政府ハ直チニ



之ニ同意ヲ表シタリ然レドモ土耳其終始奥國  
ヲ誘惑スル所トナリテ其ノ不遜、旧態ヲ悛メ  
又八月十六日ヲ以テ条約ノ成立ニ就キテ通知  
ヲ受クルノ必要ナシト宣言シ同月三十日、至  
リ締盟、三國ハ土耳其向ヒ其ノ議定シタル共  
同強制ノ處分ヲ実行スヘキヲ通知シタルモ土  
英ハ尚ホ種々ノ苦情ヲ陳ヘテ九月ヲ過クルマ  
デ毫モ讓歩ヲ為スコトヲ肯ヤス是ニ於テ三國  
ハ遂ニ其ノ強制手段ヲ実行スルニ決シ君士坦  
丁堡駐節、三國大使ハ各々アルペールニ碇泊  
シタル自國ノ艦隊ニ向ヒ土耳其埃及ノ聯合艦  
隊ノ通行ヲ遮断シテ其ノ希臘ノ海岸ヲ攻撃ス  
ルヲ禁遏シ又希臘兵、其ノ國境外ニ屯住

スル者ヲ退却セシムヘキ訓令ヲ傳ヘタリ故テ  
以テ英國艦隊ノ司令長官コドリントシハ自國  
海軍中將リニート俱ニ九月下旬ヲ以テナワリ  
シ湾ニ到リ土耳其埃及ノ艦隊ヲ合シテ同湾ニ  
屯ロシタルイブラヒンパシヤルニ締盟國ノ意  
思ヲ傳ヘタルニイブラヒンパシヤルハ俄リニ  
二十日間休戦ヲ為シテ君士坦丁堡ヨリノ命令  
ヲ待ツヘキヲ諾シタリ既ニシテイブラヒンパ  
シヤルハ希臘ノ艦隊ガコリント湾ニ戦闘ノ準  
備ヲ為セルヲ再ヒ攻撃ノ態度ヲ取リ其ノ艦隊  
ヲ進メテコリント湾ヲ襲ハントセシモコドリ  
ントシハ之ニ迫リテ更ニナワリシニ退カシメ  
次ニテコドリントシハ自國ノ艦隊ヲ露仏二國



ノ艦隊ニ合シテ十月十八日更ニナヴリンニ到  
リイブラコン「パレヤ」ニ希臘ヲ去ルノ命令ヲ  
傳ヘタリ  
是ノ時ニ當リ締盟國ト土耳其格トノ間ノ内戦ハ  
殆ト避クヘカラサルノ勢ヲ呈シタルモ而モ列  
國ノ外交家ハ高キ其ノ間ニ平和ヲ保ツノ望  
ルヲ信シ就中メテニツヒハ其ノ内戦ヲ避ク  
ルノ難キニアラサルヲ思料セリ果セル哉意外  
ノ一大事変アリテメテニフヒラシテ再々其  
ノ好運ニ際會セルノ想アラシメタリカニシ  
グハ其ノ齡僅カニ五十七歳ニ過キサルモ其ノ  
勤勞ノ甚シキガ為メ痛ク健康ヲ損ヒ病ムコト  
教日ニシテ八月八日溢焉長逝シ其ノ閣員ノ一

人ゴテリツチ之ニ代リテ内閣首相トナリ保守  
党ハ再々其ノ勢力ヲ得テウエリシトシ、更  
ニ内閣ニ入レリ是ニ於テメテニツヒハ英國  
内閣ガカンニシテ生時ニ於ケルカ如ク敢テ  
妄リニ冒險ノ政策ヲ事トスルコトナク七月六  
日、条約ノ如キニ復ク之ヲ実行スルノ意ナカ  
ルヘシト思料シ且ツ當時西改ニ於ケル紛擾ハ  
專ラ東方向題ニ熱中セル人心ヲ誘フテ西方ニ  
轉セシムルコトヲ得ヘシトナセリ蓋シ此ノ時  
ニ際シテ西班牙ノ旧教党ハフエチナシト七五  
ノ政治ヲ以テ其ノ專制權ヲ薄弱ナラシムル  
者トシ其ノ継嗣ドンカルロスノ名義ヲ仮リ  
カタコロニユニ據リテ乱ラ起シ英國ハ佛境ニ

ト  
答  
省



國ノ請求ニ由リテ遂ニドンミゲールガ葡葡方  
ノ攝政タルコトヲ承認シ具ノ維納ヲ去リテリ  
スホーヌニ歸ルハ將ニ近キニ在ラントレ而シ  
テドンミゲールニシテ再々其ノ國ニ歸ルトキ  
ハ必ズキヤ一場ノ紛乱ヲ惹起セサレハカラス加  
フハニ仏國ニ於テハヴイエリハ内閣ハ日々ニ  
具ノ声望ヲ失ヒ具ノ顛覆將ニ近キニ在ラント  
スメテハニワレハ此等ノ紛擾ヲ利用シテ一夕  
ニ東方ニ於テ露國ノ野心ヲ控制スルコト難  
カラストナシ同年十月ニ至リ土廷ヲ勸誘シテ  
自國ト訂盟國ト紛擾ニ就キテ瑣國ニ調停ヲ  
請ハシムルノ方策ヲ提出シ土廷ノ大臣ハ皆十  
之ニ同意シ一時全ク其ノ勢力ヲ列國ノ間ニ失

墜シタルメテハニワレハ今ヤ再々歐洲ノ運命  
ヲ其ノ掌中ニ把握シタルノ觀アリキ  
是ノ時ニ方リナヴリンニ於ケル一發ノ砲聲ハ  
忽然トシテ其ノ空想ヲ掃平シテ臨ナカラシメ  
タリ  
其六 ナヴリン海戦後ノ形勢  
千八百二十七年十月二十日英露仏三国ノ聯合  
艦隊ハ土耳其埃及ノ聯合艦隊トナヴリンニ戦  
フテ大ニ之ヲ破リイブラヒンハ三国艦隊ノ司  
令官ニ向ヒ其ノ再々希臘ヲ攻撃セサルヲ約シ  
辛フシテ其ノ残留セル數隻ノ軍艦ノ捕獲ヲ免  
ルコトヲ得タリ  
希臘政府ハナヴリン海戦ノ報ニ接シテ頓ニ其



希望ヲ回復シ海上ニ於テハ復タ一モ悲ル  
ニ是ル者アラストナシ急ニ其ノ守勢ヲ変シテ  
攻勢ヲ取りフアフガイエーノ率キタル一軍ハ  
シホ島ニ向ヒシユルチノ率キタル一軍ハ銳ヲ  
尽クシテアカルナリ及ビエトリラ回復セ  
ンコトヲ計リ蓋シ希臘政府ハ其ノ占取マ  
ル愈々多キトキハ其ノ保有スル所亦愈々多ク  
他日新々ニ其ノ國境ヲ定ムルニ方リ諸國ノ外  
交家ニ必ス其ノ既ニ畧取シタル土地ヲ安リニ  
削減スルカ如キコトナカレハシト思料シタル  
ナリ  
之ニ及シテ土耳其政府ハナグリニ敗績ノ為  
ニ毫モ其ノ初志ヲ翻ヘスコトナク却テ其ノ

失望ノ極無謀ノ行動ヲ事トスルニ至リ蓋シ  
土帝マムトド其ノ人ト為リ暴激奇矯ニシテ  
宛然タル東洋独裁君主ノ気風ヲ具ヘ屢々其ノ  
大臣ヲ変更シ其ノ臣僚ノ才能ヲ愛セシテ唯  
ダ其ノ已レニ諂諛スルノ術ニ長スル者ヲ愛ヌ  
ルヲ常トス故ヲ以テ帝ハ英露佛ノ三國艦隊カ  
其ノ艦隊ヲ撃破シタルヲ聞キテ益々三國ノ不  
礼ヲ憤ホリ肯テ其ノ調停ヲ容シテ希臘ノ和ヲ  
ルヲ欲セザルニナラス令テ其ノ外務大臣  
ニ傳ヘテ三國ニ向ヒ其ノ自國ニ凌辱ヲ加ヘ損  
害ヲ与ヘタルニ對シテ莫大ノ賠償ヲ得ンコト  
ヲ要求セシメタリ三國ノ大使ハ十一月十日ヲ  
以テ断シテ此ノ如キ不當ノ要求ニ應ズルコト



能ハサルヲ吞ヘ且ツ更ニ土廷大臣ヲシテ三  
國ノ提議ヲ容レシムルニ百方努力スル所アリ  
シモ絶ヘテ其効アルコトナク土廷ハ唯々其ノ  
叛臣ノ豫メ恭順ノ意ヲ表シタル後至リテ休  
戦ヲ為シ諸事皆ナク八百二十一年前ノ旧態ニ  
復シ希臘ノ施政ハ一ニ温和ト正義トヲ旨トス  
ヘキヲ諾シタルニ過キマ而シテ此ノ他ニ猶ホ  
希臘ニ對シテ与ッル所アルモ是レ唯々其ノ君  
主ノ自由ノ意思ヨリ發スル者ニシテ何人ト虽  
モ決シテ之ヲ強制スルコトヲ得ヘカラストナ  
セリ三國大使ノ事ヲ遂ニ成ラサレラ察シ相俱  
ニ其ノ帰國ノ旅券ヲ請求シ土廷大臣ノ切  
之ヲ抑留セリニ拘ハラヌ十二月八日遂ニ君士

坦丁堡ヲ去レリ既ニシテ土帝ハ國內ノ回教徒  
ヲ煽動シ基督教徒ニ對シテ其ノ慣手ノ迫害ヲ  
行ハシメ就中其ノ露國人ヲ窘蹙マシコト最モ  
甚シク凡ソ露國人ノ土領内ニ在ル者ハ之ヲ虐  
殺シ之ヲ放逐シ之ヲ捕ヘテ獄ニ投シ恣ニ  
其人高塵ニ侵入シテ貨物ヲ掠奪シ其ノ兇暴至  
ラハ八界ナク而シテ之ト同時ニ土帝ハ千七百  
二十七年中露國ト戦フテ其破ヘ界トナリ之カ  
為ノ極メテ不利益ナル條約ヲ訂結スルニ至リ  
タル波斯王ヲ勸誘シ其ノ露國トノ條約ヲ破棄  
シテ再ヒ兵ヲ起サシメ更ニ全土耳其格國各縣ノ  
知事ヲ君士坦丁堡ニ招集シテ十二月十八日之  
一ノ告諭ヲ發シテ露國カ千八百十一年以降



絶へス土耳其領内ニ於テ叛乱ヲ煽動シテ罪  
ヲ鳴ラシ露帝カアツケルマニ條約ニ於テ希臘  
問題ニ干渉セサルヲ約シナガテ忽チ其ノ約  
背キテ土帝ヲ欺ケリトナシ千八百二十六年  
ニ露國ノ要求ニ屈從セシモ今ヤ將ニ其耻ヲ雪  
グノ時機ニ達セリト爲シ其ノ忠亮ナル臣民カ  
祖先ノ功業ヲ回想シテ更ニ之ニ優ルノ功業ヲ  
樹テムコトヲ切望スル旨ヲ宣示シタリ  
此ノ告諭タル頗ル慎重ヲ欠ケル者ニシテ固ヨ  
リ之ヲ丑ニ公ニシタルニアラズ然レドモ露帝  
ニ千八百二十七年ノ末ニ於テ既ニ土帝ノ自國  
ニ對スル意思ヲ料察シテ其ノ機先ヲ制セント

欲シ十二月十二日前キニ倫敦條約ヲ再訂シ其  
ノ訂盟國ヲ誘フテ当初協定シタル強制手段  
比レテ一層嚴勵ナル措置ヲ爲スヘキヲ議定セ  
シメ而シテ已レ自ラ其ノ実行ノ任ニ當ラント  
欲シ千八百二十八年一月六日ノ公文ヲ以テ第  
一ニ露帝ノ軍兵ヲシテモルダヴィー及ビヴラ  
シニ占領セシメ弟ニ訂盟國ノ連合艦隊ヲ  
以テ君士坦丁堡及ビ亞歷山港ヲ封鎖シ及ビモ  
レリ田ヲ解キ弟ニ希臘ノ大統領カポルチ  
ストリアニ資金ヲ供給シテ其ノ窮乏ヲ救ヒ弟  
四ニ前キ君士坦丁堡ニ駐在シタル三國ノ大  
使ヲコルフル會シテ希臘ノ鎮定ニ関スル各  
般ノ方案ヲ協議セシメシテ提議シタリ

外務省



露帝カ三国同盟ニ由リテ大ニ自國ニ利スル所  
 アラントスルハ前段記スル所ニ徴シテ容易ク  
 之ヲ知ルヲ得ヘク此ノ如ク勇断果決シテ進取  
 ノ氣象ニ富メル君主ニ対シテハメテルニツヒ  
 ノ権略詐術モ亦之ヲ施スニ處ナク彼レハ日ヲ  
 逐フテ其ノ声望ヲ失墜シナグリシ海戦ノ後ハ  
 再ヒ土國ト三国同盟トノ間ニ於ケル奥國ノ調  
 停ヲ説クコトヲ敢テセサルノミナラス千八百  
 二十七年ノ末ニ至リ奥國ハ始メヨリ此ノ如キ  
 意見ヲ発シタルコトアラズト稱シ輒テ露國政  
 府ニ合シテ土廷ノ已状ヲ譴責スルニ至リ然  
 レドモ露帝ハ肯テ輕シク其ノ言ヲ信スルコト

ナク之ヲシテ其ノ言ノ信實ナルヲ証セシムル  
 カカノ奥國カ土廷ニ対シテ有シタル勢力ヲ用  
 シテ土廷ニ三国ノ要求ヲ容ルルヲ勧告ヲ為サ  
 ムコトヲ迫リメテルニツヒハ即時ニ露帝ノ  
 請求ニ應シテ土廷ニ勧告ヲ試ミタルモ而モ其  
 ノ勧告ハ故ラニ柔軟寛裕ヲ旨トシ固ヨリ土  
 ラシテ其ノ言フ所ニ聽従セシムルニ至ラス千  
 八百二十八年二月ニ至リメテルニツヒガ三国  
 政府ニ答ヘタル所ハ亦唯ダ希臘カ土帝ニ対シ  
 テ豫メ其ノ恭順ヲ表シタル後々土帝ハ唯ダ其  
 ノ自由ノ意思ヲ以テ之ニ新制度ヲ施行スヘシ  
 ト云フニ過キガリキ  
 蓋シメテルニツヒハ此ノ時ニ於テ稍々其ノ希

ト  
 客  
 省



望ヲ回復シ其ノ三国同盟ヲ解散スルニ必スシ  
モ難キニアラスト思料シタリ是ヨリ先キ千八  
百二十八年一月八日英國ニ於テハ再ヒ内閣ノ  
更迭アリテウエーリントン<sup>二</sup>具<sup>一</sup>首相ニ舉ゲ  
ラレ之ト俱ニバナルマト及ヒピール<sup>二</sup>二人<sup>一</sup>セ  
亦内閣ニ入り曩キニカンニングト其ノ意見ヲ  
同クセシ者ハ相率ヒテ内閣ヲ去リ而シテ新内  
閣ノ首相ハ嘗テ露國ヲ拘束セムト欲シテ千八  
百二十六年四月四日ノ議定書ヲ訂結シタルモ  
ナリ然レニ露國ハ東方政策ハ此ノ議定書ノ  
為メニ憂モ妨害ヲ被ラサルノミナラス英國ハ  
却テ露國ヲ援ケテ其ノ政策ヲ実行スルノ便宜  
ヲ得セシムルニ至レリ是レウエーリントン及

ト其ノ党派ノ諸士カ悔恨措ク能ハサルナリ  
トス且ウ彼等ハ希臘ニ対シテ一モ同情ヲ有ス  
ルコトナク其ノ独立ハ英國ノ為メニ二重ノ損  
害ヲ招クヘキ者ナリト思料セリ又謂ニ重ノ損  
害トハ一ニハ土耳其帝國ノ衰弱ヲ速キニハ  
地中海ニ於ケル英國海軍ノ勢力ヲ減スヘシト  
言フコト是レナリ彼等ハ切ニナグリシノ海戦  
ヲ後悔シ之ヲ称シテ意外ノ衝突不幸ノ事變ナ  
リト為セリ要スルニ彼等カ當時ニ在リテ切望  
スル所ハ一ニ露帝ヲ控制シテ土國ト俱ニ戦ヲ  
開クコトヲ得セシメサルニ在リキ  
然レモ何カニセバ果シテ露帝ヲ控制スルヲ得  
ヘキ乎塙國政府ハ敢テ彼等ト同盟ヲ約スルコ



トヲ為サ、ルモ陰カニ彼等ヲ總憑シテ露帝ノ  
政策ニ反対セシメシコトヲ計シリ故ニ若シ仏  
國ヲ誘フテ之ヲ露國ヨリ分離セシムルコトヲ  
得ハ彼等ノ計ハ半ハ成就シタル者ト謂フコト  
ヲ得ヘシ不幸ニシテ英國ニ於テウエリント  
ガ内閣ノ首相ニ任シタルト同時ニ仏國ニ於テ  
ハ従来英國ニ対シテ最モ好意ヲ表シタルヴィ  
エリル内閣外シテマハチニヤツク之ニ代リ(千  
八百二十八年一月四日)而シテ新内閣ハ決シテ  
希臘及ヒ露國ヲ断ツコトナカレヘキヲ揚言セ  
リ是ニ於テ英國内閣ハ仏國政府ヲ誘引スルニ  
百方其力ヲ尽シ就中イベリツク丰島ノ事件ニ  
関シテ仏國ノ歡心ヲ得ント欲シドシミゲール

カリスボーヌニ還リテ攝政職ニ任スルヲ諾シ  
千八百二十八年二月(嘗テカンニシグハ葡萄牙  
ニ派遣シタル軍兵ヲ召還シ(今年四月)且ツカン  
ニシグ内閣ノ宣言セシ所ニ反シテ英兵ノ既ニ  
葡萄牙ヲ去リシ後チ仏軍ノ猶ホ西班牙ニ屯駐  
スハラ許容セリドンミゲール英兵ノ既ニ其  
國ヲ去リテ復タ一モ忌憚スル所ナキヲ視テ忽  
チ憲法ノ明文ヲ蹂躪シ其憲法ニ由リテ成立シ  
タル國會ヲ解散シテ更ニ往昔ノ葡萄牙議會ヲ  
召集シ(五月二日)之ヲシテドナリマリア及びド  
ンペドロカ王位ニ即クノ權利ナキヲ議決セ  
シノ逐ニドンペドロカ葡萄牙ノ為ニ定メ  
タル憲法ヲ廢止シ其ノ宣誓ヲ破リテ自ら王位



即キ歐洲列國奉テ之ニ公認ヲ与フルコトヲ  
拒ミタルモ絶ヘテ之ヲ意トスルコトナク逸カ  
ニ旧教党ノ一派ノ援ヲ得テ專横暴虐ノ政ヲ事  
トセリ而シテ今ヨリ十八ヶ月前ニドクミゲール  
ノ党派ニ對シテ彼レカ如ク敵意ヲ表シタル英  
國政府ハ手ヲ拱シテ其ノ為スル傍觀スルノ  
外アラサリキリエリントンハ一意唯タ仏國  
政府ノ歡心ヲ得ニコトヲ務メ葡萄牙ニ於テ憲  
法ノ存スルト否トニ措キテ之ヲ向フノ違アラ  
サリシナリ  
然レ氏英國政府ノ希望ハ若シト水泡ニ歸セリ  
佛王シヤル、十世ハドクミゲールカ葡萄牙ニ  
於テ勢力ヲ得ルヲ欲セ<sup>カ</sup>ルニアラサルモ首相

コルチニヤック及ヒ其ノ内僚ハ固ク立憲旨義ヲ  
把持シテドクミゲールノ專制政ヲ喜ハス務メ  
テ自由旨義ノ運動<sup>カ</sup>扶植シテ輿論ニ満足ヲ与ヘ  
以テ歐洲列國ノ間ニ仏國ノ威信ヲ樹立セシト  
欲シ断シテ希臘ヲ扶ケテ其ノ獨立ヲ得セシム  
ル、政策ヲ固守シ敵テ英國ヲシテ之ニ妨害ヲ  
加ヘシムルヲ欲セス又露國ヲシテ独リ其ノ名  
譽ヲ專ニセシムルヲ欲セス加フルニ當時露國  
政府ハ荐リニ敵ヲ仏國ニ得シト欲シ之ニ食ハ  
シムルニ利ヲ以テシ仏國政府ニシテ果シテ露  
國ノ言ヲ聽キテ之ト相提携マシニ至ラハ往キ  
ニ千八百十四年及ヒ千八百十五年、大敗ニ由  
リテ被リタル損害ヲ回復スルハ必スシモ難事



ニアラサレテ諷言セリ

其八 露土ノ戦争

右ノ如クナルヲ以テマニヤツク内閣ハ露國ト同盟ノ約ヲ固守シテ變マレコトナク露帝ヲシテ独リ其ノ勢力ヲ東方ニ擅マシムルコトヲ得セシメサルカ為メ仏國モ亦其ノ軍兵ヲ派シテモシテ占領セシメンコトヲ要求セリ此ノ要求スル英國政府ノ甚ク欲セサル所ニテ而モ露帝ヲシテ独リ其ノ勢力ヲ東方ニ擅マシムルヲ得セシメサルノ必要ハ英國モ亦夙ニ織認スル所ナラシテ英國ハ敢テ仏國ノ要求ヲ拒ムコト能ハス然レト今時ニ土耳其ニ對シテ敵意ヲ表スルカ如キハ英國政府ノ断シ

テ為スル欲セサル所ナラシテ更ニ自國ノ兵ヲ發シテペロポ子ノ征討軍ヲ加フコトヲ敢テセサリキ既ニシテ千八百二十八年二月下旬ニ至リ帝ハ往キ一月六日ノ公文ニ於テ宣言セシ所ニ爽々其ノ同盟國ノ意向如何ニ拘ハラスシテ遂ニ土國ト戦フ前クハ決意ヲ表白セリ蓋シ露帝ハ當時既ニ土帝カ其ノ地方官ニ下シタル告諭ヲ傳聞シ之ヲ以テ土國カアツケルマニ條約ヲ破リテ露國ニ開戦ヲ宣反シタル者トシ露國ハ宜シク兵力ヲ用ヒテ其ノ土帝ノ為メニ侵害セラレタル權利ヲ回復セサルヘカラストナレ而シテ倫敦條約ニ就キテハ若シ要ムニ露國ト俱ニ之ヲ実行ヲ計ル意ナク



ニハ露國ハ自國ノ運命ヲ賭シテ独リ其ノ実行  
ノ任ニ當ルヘシトナセリ夫シ露帝ハ言ハハ必  
ズ行フノ人タルコトハ古人ノ夙ニ熟知スル所  
加フニ具ノ波斯ト戰ニ於テ波斯王フド  
アリハ一敗支フルコト能ハス千八百二十八  
年二月二十一日ツルクマンサイニ於テ悉ク  
露帝ノ要求セル條件ヲ容シテ權和條約ヲ訂結  
シタレハ露帝ハ復タ此ノ方面ニ於テ一モ顧慮  
スル所ナク其全力ヲ擧ケテダニユーブニ進ミ  
又小亞細亞ヨリ土耳其ノ背後ヲ襲フコトヲ得  
ヘシ而シテ英國政府ハ他國ノ之ヲ援ケルコト  
ヲ肯ゼザルヲ以テ独力露國ノ企圖ヲ制止スル  
コト能ハス同年三月ニ至リ唯タ露國ハ地中海

ニ於テ自由ノ行動ヲ事トスルコトナク英露仏  
三國ノ聯合艦隊ニ倫敦條約ヲ定ムル所ニ從ヒ  
訂盟國共同ノ決議ヲ經テ其ノ進退ヲ為シシコ  
トヲ要求シタルノミ  
此ノ時ニ方リシテハニツヒハ前キニ訂盟三國  
ニ提議シタル所ニ就キテ明確ナル回答ヲ得ル  
コト能ハサルヲ見テ窮迫ノ餘リ新タニ一個ノ  
方畧ヲ奏出シ千八百二十八年三月下旬ヲ以テ  
希臘ノ獨立ヲ公認スルノ況ヲ提出セリ此ノ提  
議タル往キニ千八百二十四年ニ於ケルト齊シ  
ク全ク一時ノ權謀ヨリ出テタルモノニシテ彼  
レハ始メヨリ露帝ノ必ス此ノ提議ヲ拒絶スル  
キヲ察シ又其ノ然ラムコトヲ望ミテ故ラニ之



ヲ提出シタルナリ然レモ露帝カ奥國ニ對シテ  
終始猜疑ノ念ヲ抱ケルコトハメテモ  
亦夙ニ熟知スル所故ニ彼ハ奥國政府ヨリ此ノ  
如キ方策ヲ提出スルモ露帝ハ之ト俱ニ協議ヲ  
企スコトヲ肯セサルヲ慮リ先ツ露帝ノ猜疑心  
ヲ除キテ之ヲシテ奥國ノ政策ニ協同セシメン  
ト欲シ特ニジシレバ聖彼得堡ニ派遣シ露帝  
ニ説クニ凡ソ歐洲ニ於テ必ス滅却セサルヘカ  
ラサハ大敵ハ革命主義ニ外ナラサル所以ヲ  
以テシ露國カ再ニ神聖同盟ニ復歸シテ奥國ト  
其ノ政策ヲ俱ニセシコトヲ勸告セリ  
露帝ハジシレバ説ク所ヲ聞キ其ノ希臘ノ獨立  
ヲ公認スルノ條ニ至リテ大ニ激怒シ是レ決シ

テ革命主義ヲ撲滅スル所以ニ非サルヲ詰リ且  
ウ云ク露國ハ終始神聖同盟ノ被侵者トナリ回  
ク其ノ君主政ノ首義ヲ把持シテ渝ルコトナレ  
故ニ奥帝君ハ此ノ事ニ就キテ露國ノ協賛ヲ得  
ムト欲セハ露國ハ常ニ希臘人ヲ憎ミ之ヲ以テ  
叛逆ノ民ニ外ナラストナレシテ全ク其ノ  
獨立ヲ得セシムルヲ欲セス露國ハ又妄リニ他  
國ヲ侵略シテ其版圖ヲ弘張スルノ野心ヲ有ス  
ルコトナレシ然レモ露國ハ屢ニ土耳其人ノ為メ  
ニ其ノ國ノ面目ヲ傷ケラレ其ノ民ノ利益ヲ害  
セラレタルヲ以テ唯タ其ノ讐ヲ報スルカ為メ  
ニ之ト戰フ所カムト欲スルニ苟モ自國臣民  
ノ安全ヲ保テ又且ツ土耳其帝國ニ於テ其ノ正



畜ノ勢力ヲ樹立スルヲ得ハ露國ハ直チニ其ノ  
兵ヲ載メテ土耳其格ト俱ニ和ヲ講ムヘキナリ  
ト  
露帝ノ此ノ言ハ一場ノ虚喝ヨリ出テタル者ニ  
アラザリキ其ノジレト會見レタル後數日(四  
月二十六日)露帝ハ土耳其格ニ對シテ開戦ノ告示  
ヲ發シ之ヲ歐洲列國ニ廻附シ而シテ更ニ英國  
政府ニ向ヒ今後事局ノ變動ナキ以上ハ地中海  
ニ於ケル露國艦隊ヲシテ常ニ英佛二國ノ艦隊  
ト共同ノ運動ヲ為サシムベキヲ通告シ(四月二  
十九日)其ノ後チ更ニ數日ヲ經テ陸上ニ於テ遂  
ニ交戦ノ端ヲ開キ五月七日露兵ハギリツ下ヲ  
踰ヘテ土耳其格領ニ侵入セリ

英國政府ハ百方力ヲ竭クシテ露土ノ開戦ヲ防  
止セムト欲シタルモ爰ニ至リテ復タ奈何トモ  
為スヘキニアラサレバ首相ウエルリニ下シ  
露國ノ最後ノ通告ニ満足セル者ヲ宣言シ(十八  
百二十八年六月)次ヒテ七月二日ニ至リ久シク  
中廢シタル英露佛三國ノ會議ヲ倫敦ニ開キ八  
月九日ヲ以テ更ニコルフトニ於テ協議會ヲ開  
クベキヲ議シタリ夫レ以テ如クウエルリニト  
シハ露國ニ對シテ專ラ溫柔ヲ旨トスルト同時  
ニ佛國ニ對シテモ亦同一ノ方針ヲ取リ七月十  
九日ノ條約ヲ以テ併國ノ軍兵ガツロシテ發  
シ往キテモレトテ占領スルヲ許容セリ然レド  
モ英國政府ハ其ノ内心ニ於テ佛國政府ガ能ク



此ノ條約ヲ実行シ其ノ軍兵ヲシテ埃及兵ヲペ  
ロポ子一ズヨリ退却セシメタルノ名譽ト利益  
トヲ占有セシムルヲ欲セズ故ニ他方ニハイプ  
ラヒン及ビメヘメタリト俱ニ談判ヲ開キテ  
ペロポ子一ズ半島ヲ希臘ニ還付セシムト欲シ  
遂ニ其ノ承諾ヲ得テ八月六日亞歷山港ニ於テ  
之カカ條約ヲ訂約セリ然レドモ<sup>此</sup>悞高ノ報ノ倫  
敦及ビ巴里ニ達スルニ先テ佛ノ將軍ノイブン  
ハ既ニ其ノ兵ヲ率ヒテツロニシテ八月十  
九日次ヒテ佛兵ハモレ一ニ上陸シタル後殆ム  
ド戦ヲ交フルニ及バズレテ九月十ノ兩月間ニ此  
ノ地ヲ占領シ土耳其格及ビ埃及ノ兵ハ皆其ノ守  
備ヲ撤シテ本國ニ還シリ

是ノ時ニ方リ露兵ノ一軍ハ露帝自ラ之ニ將ト  
シテ勃牙利ヲ侵シ他ノ一軍ハパスクワイツチ  
之ニ將トシテ亞耳墨尼ニ進ミ土帝ハ其ノ力遂  
ニ支フ可ラサルヲ知リテ頓ニ其ノ倨傲ノ態度  
ヲ一変シ其ノ大臣等ハ百方カヲ竭クシテ三國  
同盟ヲ離間セムト欲シ英國<sup>佛</sup>兩國ニ向<sup>テ</sup>テ再ヒ  
其ノ大使ヲ君士坦丁堡ニ派遣セムコトヲ求メ  
希臘ノ鎮定ニ就キテ二國ト恢復シ遂クルノ意  
アルヲ示セリ然レドモウエリレトレハ今君  
レ土廷ノ提議ニ應スルトキハ露帝ガ倫敦條約  
ニ規定シタル一切ノ約束ヲ無効ニ帰シタリト  
ナシ其ノ戦勝ノ餘威ニ乘レテ東欧ノ地ヲ蹂躪  
スルニ至ラシムコトヲ恐レ而シテメタルニツヒ



モ亦之ト同一ノ恐ヲ抱キタルヲ以テ土廷ノ  
議ニ遂ニ其ノ容ル、所トナラヌ三国同盟ハ依  
然トシテ其ノ旧態ヲ愛スルユトアラサリキ  
其九ノマテルニツヒノ失錯伯林朝  
廷及ビゾルヴヌレニ同盟ノ起原  
既ニシテ形勢ハ更ニ一変セリ是ヨリ先キウエ  
ルリトシテ首メ欧州列國ノ政治家ハ露國ノ兵  
カト財力トハ土耳格ニ対シテ莫カニ優勢ヲ占  
メタリトナレ露兵ハ土耳格ノ軍ヲ一戦ニ撃  
破スルヲ得ベシト思科シタルニ事實ハ必スシ  
モ斯ノ如クナラヌシテ露軍ハ亞細亞ニ於テ連  
リニ大捷ヲ獲タルニ係ラズ其ノ全局ノ勝敗ヲ  
決スヘキ政羅巴ニ於テハ露軍ハ其ハ兵器精銳

ナラス其ノ指揮亦宜キヲ得スレテ意氣頗ル阻  
喪レ苦戦困窮卒シテゾルナラテ抜ク事ヲ得タ  
ルモ政羅巴式ノ訓練ヲ受ケタル土耳格ノ新兵  
ガバルカンノ通路ヲ遮断スルガ為メニ據守レ  
タルスクーレンラノ壘ハ之ヲ久クシテ遂ニ平  
抜クコト能ハス加フルニ其ノシリストリヲ  
固ミタル軍ハ每戦利アラズレテ夥シク士卒ヲ  
失ヒ遂ニ其ノ困ヲ解キテダニユーブ沿岸ノ公  
領地ニ退却シ而シテ其ノ追軍ノ土軍ノ追撃ス  
ル所トナリテ夥シク士卒ヲ失ヒメテルニツヒ  
ハ之ヲ目シテ千八百十二年ニ於ケル拿破侖翁  
ノ莫斯科ノ敗績ニ比スベキ者ナリト言ヘリ  
メテルニツヒハ此ノ形勢ノ変ヲ視テ更ニ大ニ



其ノ勇氣ヲ回復セリ露軍ガ戦フテ勝ヲ得ルノ  
間ハ彼レハ唯ダ其ノ為ス所ヲ傍觀シテ策ノ出  
ツル所ヲ知ラサリモ其ノ一度敗北ヲ顯ハス  
ヲ視ルヤ澳帝ニ奏請シテ軍兵招集ノ令ヲ發セ  
シメ又頻リニ王廷ヲ煽動シテ極力露軍ニ抵抗  
セシメ露軍ノ内情ヲ探リテ之ヲ報告シ政例列  
國ノ間ニ露兵敗北ノ風説ヲ傳ヘ更ニ露國ニ對  
シテ一大同盟ヲ結バム事ヲ計レリ然レモ彼レ  
ハ果シテ誰ト俱ニ此ノ大同盟ヲ結バムト欲ス  
ルカ誰カ率先シテ露國ト戦端ヲ開クベシトスル  
カ英國ハ海上ニアラズムハ戦ヲ為スコト能ハ  
ズ佛國ハ明白ニ露國ニ與シト澳國若シ波蘭土ヲ籠  
ハムトスルトキハ直ニ其ノ兵ヲ伊太利及ビ

某國ニ出タレテ其ノ背後ヲ衝クズキヲ揚言セ  
シニアラズマト右ノ如キ情態ナルツ以テ澳國政府ハ普國ノ恨  
積ヲ得ルニアラズムハ輕ハレク動クコト能ハ  
ズ然レモ普國ハ正ニ是ノ時ヲ以テ漸ク澳國ヲ  
厭フノ念ヲ生シ普王フレテリク、キトキム三  
世ハ固ク露帝尼古拉一世ニ結託シ其ノ女ヲ  
以テ之ニ娶ハシ其ノ子ギトキム親王亦厚ク  
露帝ニ交ハリ其ノ後チ久レカラスレテ露帝ノ  
親戚タルウエーコト公ノ女ヲ迎ヘテ其ノ妃  
トナセリ且ツ普國政府ハ往キニ千八百十九年  
及ビ千八百二十年ニ於テハ深ク革命ノ危害ヲ  
恐レテ壽ヲ澳國ト事ヲ俱ニシタルモ今ヤ其ノ



國勢漸ク変移シテ民心頗ル平和ニ復シ  
對シテ独立ノ態度ヲ取ルモ亦一モ患フル所ナ  
キニ至リ加フルニ其ノ晩年ニ至リテ深クメテ  
ルニツヒニ結托セル宰相ハルデンベルグハ千  
八百二十二年ヲ以テ世ヲ逝リ而シテ代リテ其  
ノ後ヲ承ケタル者ハ奥國政府ガ日耳曼聯邦ニ  
施設スルガ為ニ發議セル復旧的方案ニ就キ  
テハ敢テ反對ヲ表スル士ナクシテ普國モ亦其  
ノ利益ニ與カルヲ辭セサルモ而モ其ノ發議ハ  
帝ニ奥國ニ譲リテ普國ハ唯ダ巴ムコトヲ得ズ  
シテ之ニ屈從スルノ状ヲ極ヒ以テ其ノ責任ヲ  
奥國ニ推譲スルノ政策ヲ取リシニ此ノ政策ハ  
果シテ其ノ國ニ中リテ日耳曼人民ハ漸ク其ノ

欺ク所トナリ普國政府ヲ以テ奥國政府ヨリモ  
遙カニ自由ヲ重ムスル者トシ普國ノ行政制度  
ノ~~海~~整完備シテ其ノ國勢ノ旺盛ナル他ニ之ト  
比肩スル者ナキヲ視テ大ニ欣慕ノ念ヲ生シ其  
ノ能ク日耳曼ノ統一ヲ定メテ日耳曼人民ノ權  
利自由ヲ保護スベキ者ハ奥國ニアラステ普  
國ニアリト思料シ皆存シテ望シ普國ニ屬スル  
ニ至レリ  
憶フニ日耳曼ニ於テ真個ノ國民的統一ヲ成就  
スルハ其ノ前途尙ホ遙カニ遠シ然レドモ之ニ  
先チテ豫シメ関稅及ビ商業ノ統一ヲ創メ以テ  
國民的統一ヲ計ルノ地ヲ為サロコトハ千八百  
二十年以降日耳曼商業振奮ガ屢々聯邦議會ニ



請求シテ得ル能ハサリレ所ニシテ今若シ普國  
ノカラ以テセバ之ヲ成就スルコト難キニアラ  
ズ且ツ普國ノ領土ハ各地ニ散在レテ一ニ合セ  
ザルヲ以テ連カニ内地ハ播壁ヲ撤去シ專ラ外  
國ノ經濟的侵略ニ對シテ自國ヲ保護スルノ政  
策ヲ実行スルハ聯邦内ノ他國ニ比シテ其ノ利  
スル所多ラズトセズ而シテ此ノ實益上ノ合同  
ハ施キテ思想ノ合同ヲ剔致シ之ニ由リテ其  
ノ利ヲ亨クルコト最モ多キハ固ヨリ普國政府  
ニ外ナラズ普國政府ハ之ニ見ル所アリ嗜テバ  
ツイエールトウスルランベルグトノ間ニ関稅  
同盟ヲ訂結セシニ倣ヒ比隣ノ諸小邦ヲ勸誘シ  
テ普國ト俱ニ同一ノ同盟ヲ結ハシメ又ムニフ

ヒ及ビスタツトカルドト俱ニ特別ノ関稅條約  
ヲ訂結シ北部日耳曼ノ諸國ガ普國ニ拮抗スル  
ガ為メニ締結レタルチエーリンジエノ同盟ヲ  
破壊セムコトヲ計レリ要スルニゾルウエレシ  
同盟ハ普國ノ首唱ニ由リテ今ヤ其ノ萌芽ヲ發  
生セリ是ノ時ニ方リ普國政府ガ内心憂ニニ其  
ノ專横ヲ厭ヒ其ノ日耳曼聯邦ニ於ケル霸權ヲ  
奪フテ自ラ之ニ代ラムト欲スル國ノ使候ス  
ル所トナリ其ノ辛フシテ成ルニ垂ムタル事業  
ヲ中廢シテ~~願~~ミサルガ如キハ是レ其ノ漸シテ  
為スラ欲セザル所タルヤ必セリ  
右ノ如クナルヲ以テナテルニツセガ千八百二  
十八年ノ末ニ按出レタル同盟ハ遂ニ其ノ成立



ヲ見ルニ至ラガリシモ他方ニ於テハ露國ハ一  
時其ノ同盟タル英佛二國ノ援助ヲ失フノ恐ナ  
キニアラサリキ是ノ時ニ方リウエリントシ  
ハ露軍ノ其ノ戦ニ利ナキヲ視テ英佛ノ二國ガ  
露國ニ離レテ自由ノ運動ヲ為スモ露國ハ必ズ  
土耳格ニ對シテ其ノ為ス所ヲ恣ニスルコト能  
ハズト思料シ且ツ露帝ガ一己ノ独断ヲ以テダ  
ラ子トルノ海峡ヲ封鎖シタルヲ怒リ更ニ又意  
ヲ用ヒテ佛國ノ勸心ヲ得ルコトヲ計リ其ノド  
ナリ、コリアノ葡萄牙ノ女王タルヲ公認スルト  
同時ニ更ニドシ、ミゲールニ向フテ累リニ諛言  
ヲ呈シ由リヲ以テ佛國政府ノ意ヲ喜バシノム  
ト欲シ又將來事局ノ變動ナキ限リハ佛國ノ軍

兵ガ永クベロホ子トズノ占領ヲ継続スルヲ承  
認セリ然レドモ佛國政府ハ此等ノ事ノ為メニ  
容易ニ露國ト分離スルヲ欲セズ十一月十六日  
ノ倫敦會議ニ於テ佛國政府ハ英國政府ト俱ニ  
全權大使ヲ君士坦丁堡ニ派遣シ以テ希臘ノ鎮  
定ニ関スル事件ヲ協定セシムルニ決シ之ヲ議  
定書トナシテ互ニ調印ヲ交換セリト云トモ而  
モ此ノ議定書ハ倫敦駐劄ノ露國全權大使リ  
ーヴエニヨリ之ヲ露帝ニ報告シ露帝ノ承諾ヲ  
經テ始メテ之ヲ実行スベキ者ト定メタルヲ以  
テ之レガ為メニウエリントシノ企圖ニタル  
露佛ノ分離ヲ馴致スルニ至ラサリキ

其十 倫敦會議及び三月二十二日

外務省



ノ議定書

當時ノテニツヒハ失敗ニ失敗ヲ累子タルニ  
係ラズ猶ホ未ダ希臘ノ独立ヲ妨碍スルノ政策  
ヲ断念スルニ至ラス千八百二十八年ノ十二月  
ニ至リテ彼レハ更ニ列國會議ヲ開キテ東欧ノ  
鎮定ニ関スル方法ヲ規定スルノ説ヲ主張レ而  
シテ之ト同時ニ彼レハウヰルリントト謀リ  
テ佛國政府ヲシテ外務大臣ヲフヰロシ子  
後任トシ倫敦駐劄ノ仏國全權大使ポリニヤツ  
ク公ヲ擧ケレシメ公カ王權党タルノ故ニ由リ希  
臘問題ニ就キテハ必ス換國ト其ノ意見ヲ同ク  
スベシト思料セリ然レドモ此ノ小陰謀モ亦失  
敗ニ歸レ加フルニ當時愛蘭土ノ紛擾ハ殆ムド

頂

其ノ頂点ニ達シ英國政府ハ專ラ其ノ意ヲ之ニ  
注キテ復タ他ヲ顧ミルノ暇ナク露國ヲシテ其  
ノ志ヲ逞クセシメテ之ヲ奈何トモスルコト能  
ハス是ニ於テメテルニツヒハ遂ニ策ノ出ツル  
所ヲ知ラス詐ハリテ曾テ列國會議ヲ開クノ説  
ヲ主張シタルコトアラスト詐稱シ其ノ幕僚ノ  
一人フイツケルモントヲ聖彼得堡ニ送り露帝  
ニ謁シテ其ノ誠實他意ナキヲ辨セシメタルニ  
露帝及ビ其ノ臣僚ハ毫モ其ノ言ヲ信スルコト  
ナクフイツケルモントハ痛ク其ノ輕侮嘲笑ス  
ル所トナリテ空シク本國ニ歸來セリ(千八百二  
十九年二三月ノ交)  
將夕十一月十六日ノ英佛間ノ議定書ニ就キテ



ハ露國政府ハ敢テ之ニ承認シ與フルヲ拒ムコ  
トナク唯ダ英仏二國ガ其ノ大使ヲ君士坦丁堡  
ニ派遣スルニ先キ倫敦會議ニ於テ希臘鎮定ニ  
関スル方案ヲ確定セシムコトヲ要求セシニ英  
佛二國ハ之ニ應シテ千八百二十九年三月二十  
二日大要露國ノ提議ニ基ケル一ノ議定書ヲ作  
リ英仏二國ノ大使ハ此ノ議定書ニ掲ケタル趣  
旨ヲ承シテ其ノ談判ヲ開ク可キ訓令ヲ領シ相  
携ヘテ君士坦丁堡ニ赴ケリ  
此ノ議定書ニ掲ケタル要項ハ膏テコルフ一及  
セボロスニ於テカポルチストリアト英露佛三  
國ノ大使トノ間ニ頓定セル所ニシテ新立ノ希  
臘國ハモレトシクアラト並ニアルタ及ビゲオ

ロ一湾ニ至ルマテノ希臘大陸ヲ以テ其ノ領土  
ニ充テ其政体ハ立憲君主制ト爲シ其ノ君主ハ  
英露佛ノ三國ヲ除キタル諸國ノ王族ニシテ基  
督教ヲ奉スル者ノ中ヨリ最初ハ締盟ノ三國相  
議シテ之ヲ撰定シ以テ土廷ノ承認ヲ受ケベキ  
者トシ又希臘ハ毎年百五十万ピアストルノ貢  
金ヲ土帝ニ納メ且ツ土耳其ノ希臘ノ領内ヲ引  
拂フ者ニハ其ノ遺留セル財産ニ對シテ相當ノ  
賠償之爲スベシト定メタリ  
右ノ外議定書ニ於テハ英國政府ノ要求ニ由リ  
テ希臘政府ノ爲メニ極メテ不利益ナル一ノ條  
件ヲ加ヘタリ其ノ事タル他ナシ希臘問題ノ確  
定スルニ至ルマテ希臘兵ハモレト及ビ其ノ附



近、群島、外之ヲ占領スルヲ得ベカラズト言  
フコト是ナリカホ、チストリツハ此ノ要求ノ  
露佛二國ノ欲セサル所タルヲ察シテ大ニ之ヲ  
抗言シ何レノ方面ニ於テモ肯テ其ノ兵ノ占領  
シ撤去セザルノミナラズ更ニ北方ニ向フテ益  
々其ノ兵ヲ進メ以テ格ノヲ其ノ新王國ノ疆域  
ヲ出来ル限リ擴張セハコトヲ計シリ將タ土耳  
格政府ニ至リテハ同年六月英佛二國ノ大使ヲ  
接見シテ大ニ之ヲ優遇セリト雖ドモ而モ三國  
ノ議定書ニハ遂ニ同意ヲ表スルノ色アラザリ  
キ  
其十一  
夫レ此ノ如ク若自ノ利害若自ノ野心ノ際限ナ

キ衝突ハ到底兵力ニアラムバ之ヲ決スルコ  
ト能ハス露土ノ戦争ハ千八百二十八年ニ於テ  
ハ兩軍ノ交鋒ニ終リシモ千八百二十九年ニ至  
リテ兩軍ノ勝敗遂ニ全ク決セリ亞細亞ニ於テ  
ハ露將パスケウイツテハ其ノ兵ヲ進メテ既ニ  
エルセルインヲ隔レ政羅巴ニ於テハ露軍ハ希  
臘ノ兵ニ合シテ再ビ勃牙利ニ出テ土耳其格ノ兵  
ヲリレウツチニ破アリ(六月)レリストリー  
隔レ長駆シテバルカンヲ踰ヘチービツツノ率  
ヒタル一軍ハ八月二十日アンドンノ率  
達シ其ノ前衛ハ君士坦丁堡ヲ距ルコト僅カニ  
數里ヲ過ギサレ地ニ陣シタリ然レトモ當時チ  
ービツツノ率ヒタル兵士ハ其ノ數纒カニ二萬



ニ過キズシテ懸軍長驅深ク敵地ニ侵入シスコ  
ニトラパーパシヤノ兵ハ將ニ來リテ其ノ側面ヲ  
襲ハムトシ其ノ勝敗ノ數逆シメ得テ知ルベキ  
ニアラズ露帝其ノ危険ナルヲ察シ連力ニ其ノ  
戦局ヲ收メムト欲シ千八百二十九年六月其ノ  
岳父タル普王ニ向ヒ調停ノ勞ヲ執ラムフトラ  
乞ヘリ普王其ノ乞ヲ容レ將軍ニユフリシテ  
君士坦丁堡ニ送リテ玉帝ニ説ク所アリシニ是  
ヨリ先キ露軍ノ遠處ニ在リシ間ハ玉帝ハ  
執拗自尊ニシテ絶ヘテ他國ノ調停ヲ容ルコ  
トヲ肯レゼサリシモ露軍既ニ君士坦丁堡ヲ距  
ルコト數里ノ地ニ在ルヲ聞キヤ玉帝ハ其ノ延  
臣ト俱ニ周章措ク所ヲ知ラズ加フルニ當時英

佛ノ大使ヲ始メ何人モ玉帝ヲ慰藉シテ若シ靜  
カニ數日ヲ支フルトキハ必然露軍ノ大敗ニ歸  
スベキノ事情ヲ告グル者ナク玉帝ハミユフリ  
シテ説ク容レテ其ノ條件ノ如何ヲ論セス即  
時ニ媾和ヲ為サムト欲シミユフリシテハ一旦  
其ノ普國ニ歸リ更ニ普國ノ使者トロアイエリ  
ナル者急ニテトビツフノ陣ニ赴キ其ノ斡旋ニ  
由リテ九月十四日露土ノ間ニアンドリノ一  
ルノ條約ト並ニ本條約ノ疑義ヲ解説シ及ビ其  
ノ実施ノ細則ヲ定メタル附帶條約トヲ訂結シ  
タリ  
本條約ニ規定シタル所ニ據ルニ露帝ハ政羅巴  
ニ於テ露軍ノ征略シタル土國ノ領土ニ就キダ



ニエーゴ河口ノ島<sup>ル</sup>除クノ外総テ之ヲ土廷  
ニ還與シ而シテ亞細亞ニ於テハ往キニアツケ  
ルマンノ條約ニ由リテ收得シタル諸城寨ノ外  
更ニアナパー、ポチー、アリハルチツク、アツク  
ル、アクハルカラキー等ノ諸城寨ヲ保有シ又モ  
ルダグイー、ブラシー、及ビセルビヤノ保有スベ  
キ右般ノ權利ヲ確認シ土廷ハ露國其他ノ和親  
國ノ船舶ノダクル子トル及ビボスフォル海  
峽ヲ自由ニ通航スルヲ允許シ露國ノ臣民ハ全  
土耳格帝國內及ビ里海ニ於テ自由ニ貿易ヲ營  
ムノ權利ヲ享有シ土廷ハ露國ニ對シ軍費其他  
各種ノ損害賠償トシテ千五百五十万<sup>一</sup>チエカ<sup>一</sup>  
億三千七百<sup>一</sup>万<sup>一</sup>スラ<sup>一</sup>レ<sup>一</sup>ヲ拂フベク而シテ其ノ金

額ノ支拂ヲ終ルマデ露兵ハ勃牙利及ビタニエ  
ーゴ沿岸ノ公領地ヲ占領スヘキ者トシ最後ニ  
希臘事件ニ就キテハ土廷ハ一切條件ヲ定メズ  
シテ七月六日ノ條約及ビ三月二十日ノ議定  
書ニ同意ヲ表スベシトナセリ  
右ノ本條約ノ外別ニ償金拂渡シノ手續ヲ規定  
シタル條約アリ又モルダグイー及ビブラシー  
ニ關スル條約アリ而シテ此ノ最後ノ條約中ニ  
ハ知事<sup>ホスホグール</sup>ノ任期ヲ七年ナリシヲ段ノテ終身トナ  
シタニエーゴノ左岸ニ在ル土耳格ノ城寨ヲ公  
領地ニ讓與シテ之ヲ破壊スル旨ヲ規定シタリ  
右ノ媾和條約ハ露國ノ為メニハ實ニ無上ノ大  
勝ニシテ尼哥拉士帝ノ強硬果敢ナル政策ハ是



ニ至リテ初メテ其ノ効果ヲ奏シタル者ト謂ハ  
サルベカラズ此ノ條約ニ基キテモルダグイ  
ブラレ、セルビヤ及ビ希臘ニ施設セル新制度  
ハ是等ノ諸國ヲシテ完全ナル独立ヲ得セシム  
ルノ端ヲ啓キ土耳其格ハ之ニ由リテ露國ノ侵寇  
ヲ遮断スベキ一切ノ藩屏ヲ失ヘリ且テ露帝ハ  
土廷ノ到底拂フコト能ハサル價金ノ担保トシ  
テ其咽喉ノ地ヲ扼守シ亞細亞ニ於テハ之ニ對  
シテ攻撃的ノ地位ヲ占有シ加フルニ黑海及ビ  
海峡ノ自由通航權ニ由リ其ノ收得セル商業上  
ノ利益ニ由リ其ノ土耳其ノ附庸國ニ對シテ有  
スル所ノ勢力ニ由リ其ノ土領内ニ位スル基督  
教徒ヲ保護スルノ辭柄ニ由リテ之ヲ控制レ之

ヲ窘蹙シ其ノ意ヲ欲スル所ニ從フテ何時ニ係  
ラズ之ト爭端ヲ啓クコトヲ得ベク此ノ如クシ  
テ露國ハ其ノ自ラ君士坦丁堡ヲ占領スルヨリ  
モ軍資ヲ費ヤシ危險ヲ冒カスコト遙カニ小ニ  
シテ土國ヲ其ノ衝軋ノ下ニ置クコトヲ得ベシ  
是レ其ノ外觀ハ頗ル自ラ抑損スルガ如クシテ  
其ノ實ハ自ラ東歐ノ主人トナレル者ナリ其ノ  
後子孫モナクシテ子ツセルロツドノ言ヘルガ  
如ク是ヨリ以降土耳其帝國ハ露國ノ保護ニ由  
リテ總カニ其ノ存立ヲ保チ露國ノ欲スル所ハ  
一トシテ土廷ニ聽カレサルハナク土廷一度其  
ノ約ニ背クコトアラム守其ノ滅亡ハ必ズ強ク  
徒ラサズシテ到ルノ勢アリキ



其十二 希臘ノ独立

土耳其政府ハ後ニ至リテ其ノ倉皇和議ニ媾シ  
タルノ非ナルヲ悟リタルモ而モ事既ニ去リテ  
亦如何トモスルコト能ハス是ノ時ニ方リスコ  
ドラーパレマトハフイリツボ、リ、ヨ、出、デ  
准ミテチービツツノ兵ヲ撃破スルハ難キニア  
ラスチービツツ之ヲ懼ルテパレヤトヲ土帝ニ  
讓シテ云ク「パレヤ」ハ曩キニ解隊セラレタル  
親衛兵ト謀ラ通シ帝ニ迫リテ曩日ノ怨ヲ雪ガ  
ムト欲スル者ナリト土帝ハ其ノ言ヲ所ク信シ  
付ムレテ其ノ臣下ノ制令ヲ受レヨリモ寧口柔  
順ニアンド下リノトアルハ條約ヲ執行スルニ若  
カスト思料シ仍テ千八百二十九年十一月三十

九日ノ勅令ヲ以テセルビヤノ自治ヲ許シモル  
グゾイ、ト及ビグラヒーニ再ビ特權ヲ附與シ露  
人ノ為メニ各地ニ貿易場ヲ開キ唯ダ希臘ニ関  
スル件ト其ノ支拂フベキ償金トニ就キテ亦レ  
テ異議ヲ唱ヘタルノミ而シテ償金減額ノ件ニ  
就キテハ聖彼得堡ニ於テ反覆談判ノ後テ露帝  
ハ土帝ニ對スルハ宛モ君主ノ臣僚ニ對スルガ  
如ク特ニ之ニ恩典ヲ垂レテ三百萬テ「ムカ」ト  
減スルコトヲ許容レ其ノ軍兵ノル、メ、リ、ト及  
ビ勃牙利ノ占領ヲ撤スヘキヲ令シ十月ニ至リ  
テ土廷既ニ其ノ償金ノ第一回ノ掛込ヲ了リタ  
ル後チハレリストリ、ノ城寨ノ外悉ク其ノ  
占領ヲ撤スベキヲ宣言セリ(千八百三十年四月



十日蓋シ露帝ハ土廷ノ到底其ノ債金ノ全額ヲ  
拂フベキ資カナキヲ知リ又其ノタニエトブノ  
通航權ニ由リモルダグイ、セラレ、諸州ニ  
防禦ノ備ナキニ由リ露兵ハ何時ニ拘ハラス容  
易クバルカレニ侵入スルヲ得ベキヲ察シ其ノ  
債金ヲ減シ其ノ占領ヲ撤スルモ一モ自ラ失フ  
所アラズト思料シタルナリ且ツ露帝ヨリ右ノ  
讓歩ヲ為シタルノ報酬トシテ土帝ハ希臘ニ與  
スル件ニ就キ前キニ倫敦會議ニ於テ悞定セシ  
所ニ全然同意ヲ表スベキヲ諾シタリ而シテ其  
ノ所謂倫敦會議ニ於テ悞定セル所ハ三月二  
十二日ノ議定書ニ定メタル所ト稍々其ノ趣ヲ  
異ニセル者アリ

希臘人ハ實際ニ於テ夙ニ土耳其ノ羈絆ヲ免レ  
唯ダ其ノ附庸國タルノ關係ヲ有シタルニ過ギ  
ザリシモ今ヤ之ヲ以テ足レリトナサズシテ純  
然タル自主獨立ノ國タラムト欲レ而シテ英佛  
ノ二國モ亦之ヲ援ケテ其ノ要求ヲ遂ケシナム  
コトヲ計レリ蓋シ希臘ニ於テダニエトブ沿岸  
ノ公領地ニ均シキ制度ヲ布クトキハ露國ハモ  
ルダグイ及ビヴラレトニ於テルガ如ク輒モス  
レバ其ノ内政ニ干渉シテ屢々土耳其ト紛争シ  
事トシ因リテ以テ其ノ勢力ヲ東歐ニ振張スル  
ノ障礙トナスコトヲ得ベク是レ決シテ英佛二  
國ノ利スル所ニアラズ故ニ千八百二十九年十  
月ニ至リ一旦中止シタル倫敦會議ヲ再開シ希



臘政府ハ土耳其格ニ對シテ全ク附庸ノ關係ヲ絶  
ツベキヲ議決シ而シテ露國モ亦此ノ議決ニ對  
シテ敢テ異論ヲ唱フルコトアラザリキ他ナシ  
露國ハ其ノ戰勝ノ餘威ニ乘シテ其ノ勢力能ク  
君士坦丁堡ヲ壓シ又能クノイプリーヲ壓スル  
ニ至リタルヲ確信セシカ故ナリ但タ露國ハ一  
層土國ノ勢力ヲ削弱シ併セテ英國ヲ却制セム  
ト欲シ三月二十二日ノ議定書ニ載セタルガ如  
ク希臘ノ版圖ヲ東部ニ於テアルタニ達セシメ  
ムコトヲ主張シタルモ英國政府ノ背ク所トナ  
ラスシテ其ノ領域ハ岸ニモレシクラード及  
ビスベルレユトス河口トアヌプロポタノート  
ノ間ニ在ル諸州ニ限ルベキニ決シ其ノ政体ハ

君主政体トナシ倫敦會議ハ列國ヨリ推薦セル  
數名ノ候補者中ニ就キ希臘人が五年前ヨリ其  
ノ王ニ戴カラムコトヲ請求セルサクス、コブー  
ルノレオポルド公ヲ擬定シ千八百三十年二月  
三日前記ノ決議ニ基キテ作りタル議定書ノ調  
印ヲ終リ希臘問題ハ今ヤ全ク其ノ局ヲ結ビタ  
ルノ外觀ヲ呈レタリ  
然レドモ其ノ實ハ未ダ粹カニ然ルコト能ハス  
シテ希臘問題ハ其ノ後々數年ノ間尚ホ列國ノ  
外交家ヲ懊悩セシメタリ倫敦會議ニ於テ希臘  
王ニ撰定シタルレオポルド公ハ人トナリ聰明  
ニシテ其ノ思慮常ニ慎重ヲ著トシ敢テ輕々シ  
ク人ノ為メニ勸カサル者ニアラズ公ハ英王



レヨールルユ四世ガ尚ホ攝政ノ職ニアリシ時  
其ノ女ヲロツテル下公主娶リテ其ノ妃トナセ  
レニ公主ハ一子ガモ奉ケズレテ千八百十七年  
病ニテ歿セリ公ハ其ノ妃ノ逝去シタル後子巨  
万ノ遺産ヲ得テ永ク倫敦ニ居住シ専ラ自由党  
諸名士ト交遊シテ大ニ其ノ信用ヲ得タリシカ  
バ保守党ハ常ニ公ノ勢力ヲ忌ミ其ノ岳父タル  
レヨールルユ王モ亦大ニ公ヲ疎シ其ノ健ニ英國  
ヲ去リテ希臘王ノ位ニ即カムコトヲ希望セリ  
然レドモレヨールルユ王ハ今ヤ既ニ六十八歳  
ノ高齢ニ達シ加フルニ千八百三十年一月急ニ  
病ニ罹リ其ノ崩殂スルコト將ニ近キニアラム  
トシ而シテ王ニ他ノ子ナキヲ以テ其ノ崩殂ノ

後ハ王弟クラレレス公爵代リテ王位ヲ継クベ  
シト亟ニ公爵モ亦年老セテ子ナク且ツ身体頗  
ル羸弱ナルヲ以テ更ニ之ニ代リテ英國ノ王位  
ヲ継グベキ者ハ其ノ姪グイクトリア公主ニ外  
ナラス然ルニ公主ハ其ノ齡纔ニ十一歳ニ過ギ  
ザルヲ以テ其ノ即位ノ後子ハ必ス攝政ヲ置カ  
ザルベカラス公主ノ母ハレオポルド公ノ妹ニ  
レテ公ハ則チ公主ノ叔父タルガ故ニ此ノ場合  
ニ至レバ攝政ノ任ハ先ツ之ヲ公ニ擬セサルベ  
カラス右ノ如キ事情ナルヲ以テレオポルド公  
ハ數年前ニ於テハ初リニ希臘ノ王冠ヲ得ルコ  
トヲ希望セシモ此ノ時ニ至リテハ容易ク希臘  
ニ王タルコトヲ肯ヒセス二月十一日書ヲ倫敦



會議ニ向フテ(一)希臘ノ独立ハ列國共同シテ之  
ヲ保障スヘシ(二)新王國ハ多島海ニ散在セル數  
島ノ島嶼ヲ其ノ版圖ノ内ニ加ヘ且ツ北方ニ於  
テ更ニ其ノ疆域ヲ擴張スベシ(三)新政府ハ必要  
ナル資金ヲ供給スベシ(四)三國同盟ハ急ニ其ノ  
兵力ノ援助ヲ撤去セサルベシト、四條件ヲ提  
出シ其ノ承認ヲ得ルコトヲ要求セリ  
倫敦會議ハ二月二十日ノ議定書ヲ以テオポ  
ルド公ノ請求セル四條件ノ中其ノ三條件ヲ可  
納シ希臘ノ独立ヲ保障シ新王國ノ經費ニ充ツ  
ベキ六百万フランヲ貸與シ並ニ當時モレトシ  
占領セル他國ノ軍兵ハ爾後尚ホ一ケ年間其ハ  
占領ヲ撤セザル可キヲ諾シタリ然レドモ新王

國ノ疆界ニ就キテハ二月三日ノ條約ニ定メタ  
ル所ヲ一切變更スルヲ肯レセス唯テ列國ハ土  
帝ニ勸告シテオモス及ビカンデーノ西島ニ特  
ニ自由制度布カレモノコトシカムヘシト言  
ヘリレオポルド公ハ此ノ回答ニ接シテ十分ノ  
満足ヲ表スルコト能ハガルモ亦強ヒテ異論ヲ  
唱フルコトナク會議ハ右ノ如ク修正レタル宣  
言書ヲ土耳其格希臘ノ西政府ニ通告シタルニ是  
ヨリ先キ頑硬不屈ナリシ土耳其政府ハ今ヤ事  
コトニ柔順シ旨トシ四月二十四日ヲ以テ右ノ  
協定ニ就キテ一切異論ナキ旨ヲ答ヘタリ然レ  
トモ希臘ニ至リテハ之ト大ニ其ノ趣ヲ異ニス  
假政府ノ首長カポー、テストアハ陸カニ露國ノ



煽動スル所トナリテ英國ノ推薦ニ出テタルレ  
オポルド公カ希臘ノ王位ニ就クコトヲ好マズ  
且ツ其ノ自ラ兼有スル政權ヲ失ハサルカ為メ  
レオポルド公ヲシテ自ラ希臘ノ王位ヲ嫌惡シ  
テ之ヲ辞セシムルニ君カズト思料セリ是ヨリ  
先キカポル、デストリ、アハ、一千八百二十八年一  
月ヲ以テ、ノ、ト、ア、リ、ト、ニ、乘、リ、シ、以、來、千、八、百、二、十、  
七、年、ノ、憲、法、ヲ、中、止、シ、テ、姿、マ、ニ、專、斷、ノ、政、ヲ、事、ト  
レ、之、レ、ガ、監、督、ノ、任、ニ、當、レ、ル、ハ、繼、カ、ニ、一、ノ、元、老  
院、ア、ル、モ、而、モ、其、ノ、議、負、ハ、概、テ、彼、レ、ノ、推、薦、ニ、出  
テ、事、コ、ト、ニ、彼、レ、ノ、鼻、息、ヲ、窺、ヒ、復、テ、獨、立、ノ、意  
思、ヲ、有、セ、ス、故、ニ、彼、レ、ガ、内、意、ヲ、受、ケ、テ、四、月、十、日  
元、老、院、ヨ、リ、奏、シ、タ、ル、意、見、書、ハ、其、ノ、外、形、ニ、於、テ

倫敦會議及ビレオポルドニ向テ頗ル尊敬ヲ表  
セリト雖下モ其ノ實ハ倫敦會議ノ議定書ニ全  
然同意ヲ表シタル者ニアラス即チ其ノ意見書  
ノ要領ハ希臘國民ハ自己ノ運命ニ關スル事項  
ニ就キテ恣議ニ與カル權利ヲ有スベク其ノ憲  
法ハ其ノ代表者ノ自由ノ討議ヨリ成レル者ヲ  
ルベク新王國ハ二月三日ノ條約ニ定メタル疆  
界ニ満足スルコト能ハス新クニ國王ノ位ニ即  
クベキ者ハ必ス希臘教ヲ奉セザルベカラスト  
言フニ在リキ而シテ之ト同時ニカポル、デ、ス、ト  
リアハ外面ニ於テ倫敦會議ヲ撰擇ニ同意ヲ表  
スベキ者ヲ揚言シレオポルド公ニ向テ陸カニ  
希臘ニ來ラムコトヲ請求セルニ係ラズ其ノ書



中ニハ希臘ノ困苦窮乏ヲ極メ其ノ臣民ガ野蠻  
不規律ニシテ統治スルニ難ク且ツ其ノ疆界ニ  
関スル倫敦會議ノ決議ニ就キテ痛ク失望ノ念  
ヲ生シタルヲ縷述シ以テシオポルド公ヲシテ  
希臘ノ王位ヲ嫌惡セシムコトヲ計リシオポ  
ル下公ハ初ノヨリ希臘ニ王タルコト好マザル  
ヲ以テ此ノ書ヲ視テ益々之ヲ厭フノ念ヲ生シ  
加フルニジヨールジュ四世ノ病ハ此ノ時ニ至  
リテ著レク其ノ危篤ヲ加ヘタルバ公ハ遂ニ意  
ヲ決シテ希臘ノ王位ヲ辞セムト欲シ三月二十  
一日ヲ以テ其ノ由ヲ倫敦會議ニ通告シ會議ヨ  
リ再三之ヲ勸誘セシニ係ラス固ク執リテ起ツ  
コトヲ肯ムセガリキ是ニ於テ會議ハ更ニ希臘

ノ王タルベキ者ヲ撰定セムコトヲ協議セシモ  
數月ノ久レキニ直リテ其ノ協議決スルコト能  
ハス而シテ希臘國民ハカポリテストリブノ陰  
險奸詐ナルニ痛ク不満ノ念ヲ生シ千八百三十  
年八月ニ至ルマテ首ヲ延バシテ倫敦會議ガ其  
ノ國王ヲ撰定スルヲ族テリ山ニテ  
其十三ノホリニマツクノ空想  
前述ノ如クナルヲ以テ希臘問題ハ尚ホ一点ノ  
黒雲ヲ歐洲ノ天ニ留メ其ノ奈シテ暴風猛雨ト  
ナルノ日ナキヲ期セス加フルニ當時諸國ノ中  
動モスレバ東歐ヲ地盤トシテ一種大胆ノ方策  
ヲ画キ以テ維納會議ノ事業ヲ敗壞セムコトヲ  
企ツル者アリ故ヲ以テ歐洲列國就中英墺二國



ハ東方問題ニ執キテ片時モ其ノ憂慮ヲ去クコト能ハザリキ是ヨリ先キ仏國ニ於テハメテルニツセ及ビウエルリントシノ希望セシガ如ク千八百二十九年八月八日ホリニヤツク公ヲ奉クテ首相トナセシモ公ノ外交政策ハ大ニ二人ノ豫想ニ及シ二人シテ是モ其ノ意ヲ安セシムルニ足ルモアラザリキ蓋シ公ハ守旧党ノ最モ頑硬ナル者ニシテ自由党及ビ憲法党ハホリニヤツクノ名ヲ耳ニスルヲ尚ホ且ツ憤懣ニ勝ツルコト能ハス故ニ公ノ政柄ヲ握ルヤ專ラ外ニ向フテ仏國ノ光榮ヲ宣揚スルヲ名トシ以テ國內ノ不平ヲ鎮壓シテ其ノ痛昔ノ志望タル壓制ノ政策ヲ実行セムト欲シ其ノ同僚及

ビ國王シヤル、十世ニ説キテ深ク露國ニ結托セシメ東政ノ危機ニ乘シテ殆ム下全政ノ地圖ヲ改造スベキ一個粗大ノ方策ヲ察出シタリ即チ其ノ方策ニ據ルニ土耳其格ヲバルカシ半島ヨリ驅逐シテ露國ハモルケウイ<sup>イ</sup>及ビヴラヒ<sup>イ</sup>ヲ收メ奥國ハセルビヤ、ボスニヤ、ヘルゼゴウイ<sup>イ</sup>ト又及ビ土領タルマシ<sup>イ</sup>ヲ取リ半島ノ自餘ノ地方ハ君士坦丁堡、希臘及ビ附近ノ島嶼ト俱ニ新クニ一國ヲ組成シ和蘭王ヲ御ヘテ之ニ君ヲラシメ和蘭ハ其ノ独立ヲ失フテサツクスト俱ニ普國ハ有ニ歸シ而シテ普國ハ其ノ報酬トシテ萊因ノ左岸ニ於テ領シタル土地ヲサツクスト王ニ與ヘ佛王ハ白耳義カ山堡及ビ千八百十五



年十一月二十日、條約ニ由リテ割取セラレタ  
ル土地ヲ回復シ從來其ノ版圖中斷シテ二部ト  
ナレルバ、バグイエールハ、更ニ若干ノ領土ヲ加ヘ  
テ一ニ合シ、英國ハ、和蘭ノ殖民地ヲ併セ、地中海  
ニ濱レタル、阿非利加ノ、靈地ハ、別ニ独立ノ邦國  
トナスベキ者トス  
此ノ粗大ニシテ、**架空ナル**方策ハ、アンドンリノ  
アルノ媾和條約後始メテ露帝厄哥拉士一世ノ  
知ル所トナレリ、然レドモ、**ヤツクハ露土**  
ノ戰ヒ既ニ其ノ局ヲ結ビタル後モ尚ホ其ノ方  
策ヲ実行セムト欲シ、千八百二十九年ヨリ千八  
百三十年ニ亘レル冬期間ニ此ノ事ニ就キテ密  
カニ露國ト俱ニ談判ヲ開キタリシガ之ヲ久ク

シテ其ノ秘密ハ漸ク世人ノ謀知スル所トナレ  
リ勿論露國ハ二國ハ此ノ件ニ就キテ一モ決定  
セシ所アルニアラズ、將ク二國ハ此ノ方策ニ就  
キテ永ク**意見**ヲ一ニシ其ノ実行ニ着手スル  
ノ望アルニアラズ、然レドモ唯ダ其ノ確実疑ヲ  
容ル可ラサル一事ハ二國ガ此ノ時ヨリシテ深  
ク相結托シタルコト是ナリ、而シテ千八百三十  
年ノ始メ、**ボリニヤツク**内閣ガ兵ヲ發シテアル  
セリ、**商長**ヲ討伐スルニ方リ、聖彼得堡ノ政府  
ガ深ク之ニ好意ヲ表シタルガ如キ、蓋シ其ノ最  
モ較著ナル一例ナリトス、是ノ時ニ方リ、**仏國**ノ  
人心ハ漸ク其ノ政治ノ專横ナルニ憤激シ之レ  
カ為ノ輒モスレバ革命ノ變乱ヲ惹起セムトス



ルノ恣レヨルヲ以テ政府ハ征戰ノ光榮ニ由リ  
テ内地ノ不平ヲ鎮壓セムト欲シ嘗テ千八百二  
十七年アルゼーノ商長カ仏國領事ニ凌辱ヲ加  
ヘタルヲ名トシ大兵ヲ起シテ之ヲ征セムコト  
ヲ計シ英國政府ハアルゼーノ商長ガ土耳格  
帝ノ藩臣タルト仏國ノ此ノ舉ガ自國ノ利益ヲ  
害スルトノ故ニ由リテ再三仏國政府ニ照會シ  
テ其ノ征討ヲ止ムコトヲ要求セシモ仏國政  
府ハ遂ニ其ノ要求ニ應スルコトナク遠征軍ハ  
千八百三十年五月ヲ以テ本國ヲ發シ同年七月  
アルゼーヲ攻メテ之ヲ拔ケリ是ニ於テ英國政  
府ハ仏國ニ向フテ其ノ征略シタル土地ヲ領有  
スルノ不當ナルヲ難シ而シテシマル、十世ハ

其ノ一度ビ征服シタル土地ヲ放棄スルノ意ナ  
ク英仏二國ハ頗ニ相及目疾視スルニ至リ人ヲ  
レテ其ノ禍穢ノ破裂スル殆ムト目睫ノ間ニ迫  
レルノ想アラシメタリ  
上乗記述スルカ如クナルヲ以テ千八百三十年  
ノ半ハニ至リ神聖同盟ハ早既ニ解散シテ跡ナ  
キニ至リ嘗テ露帝亞歷山ノ首唱ニ由リ俄同  
一致永ク相偷ルコトナカラムコトヲ疑ヒタル  
歐洲五大強國ノ中ニ就キテ今尚ホ其ノ提挈ヲ  
絶タガル者ハ独リ露仏ノ二國アルノミ而シテ  
此ノ二國ハ存シテ英澳二國ト相容ル、コト能  
ハズ澳國ハ既ニ普國ノ背ク所トナリテ全ク孤  
立ノ境ニ陥リ嘗テ其ノ意ノ欲スルガ儘ニ歐洲



ヲ進行セシムコトヲ計リタル或ハ寧ろ其ノ進  
行ヲ妨ケムコトヲ計リタルメテルニツヒハ其  
ノ信用勇力並ニ地ヲ拓クテ空シク千八百十五  
年ノ條約ニ由リテ定立シタル有形上ノ均勢ハ  
今ヤ其ノ基礎動搖シテ到底之ヲ久シキニ支持  
スルコト能ハス若シ夫レ無形ノ均勢ニ至リテ  
ハ從來列國ノ宴乱ノ為メニ屢々動搖ヲ来タレ  
而シテ千八百三十年ノ革命ニ由リテ將ニ一大  
打撃ヲ被ラムトシ千八百二十年ヨリ千八百二  
十三年ニ至リテ彼レガ如ク壓抑稍束ヲ受ケタ  
ル自由ノ精神ハ今ヤ再ビ到ル処ニ發生シ亞米  
利加及ビ希臘ハ独立ハ壓制ニ慍ナル諸國民ノ  
為メニ擧ルベキノ事例ヲ示シ波蘭土ハ再ビ起

リテ其ノ權利ヲ要求セムト欲シ日耳曼ハ漸ク  
自己ノ利益ト自己ノ実カトヲ識認スルニ至リ  
自耳義モ亦將ニ独立ヲ計ラムトシ英國ニ於テ  
ハ民主ノ思想頓ニ勃興シ伊太利ハ既ニ其ノ陰  
謀ノ端ヲ啓キ独裁政治ト憲法政治トハ下レ、三  
テールト下ナリーマリアトノ名義ヲ以テ交々葡  
萄牙ヲ争ヒ西班牙モフエゲナレド七世ガ其ノ  
継嗣ヲ定ムルノ措置宜シキヲ得サレガ為メ日  
ナラズシテ將ニ同一ノ争鬭ヲ惹起セムトシ最  
後ニ四十年來革命ノ母國ヲ以テ目セラレタル  
仏國ハシマレ、十世ノ執政ニ若フルガ為メ今  
ヤ將ニ蹶起シテ其ノ王室ヲ覆ヘサムトシ而シ  
テ政洲全土ハ一度ニ仏國ノ信号ニ接ヒテ相供







